

昭和五十五年三月  
岩手県文化財調査報告書第四十一集

岩手県「歴史の道」調査報告

今泉街道

岩手県教育委員会

昭和五十五年三月  
岩手県文化財調査報告書第四十一集

岩手県「歴史の道」調査報告

# 今泉街道

岩手県教育委員会

## 序

道・河川などの交通路は、古くから文物や人々の交流の舞台になっており、本県の歴史を知る上にきわめて重要な意味をもっております。

しかし、近年、産業経済が著しく発展し、社会構造が変遷するなかで、かつては交通が大変不便であった山道も改良され、舗装されて近代的な道路にかなりつつあります。これに伴って街道の並木・番所跡・一里塚などの交通関係の遺跡も急激に失われてきておりますが、本県では、このような現状を重視し、昭和五十三年度から国庫補助を受けて歴史の道の調査を実施して参りました。

本報告書は、本年度に調査しました七街道のうち、奥州道中の山目宿から東に進み、気仙郡今泉宿にいたる「今泉街道」について、街道の現状と文化財の保存状況など、その周囲の環境を含めて総合的に調査し、その成果を集成したものであります。

本書が、今後の交通関係遺跡の保護及び歴史の道研究の一助となれば幸いです。

なお、調査に御協力いただきました調査員各位並びに関係市町村教育委員会をはじめ諸資料を提供して下さった方々に対し、衷心より感謝申し上げます。

昭和五十五年三月

岩手県教育委員会

教育長 新里 盈



## 例言

- 一、本書は歴史の道「今泉街道」に関する報告書である。
- 二、本調査は主として次にあげるものを収集し、調査を実施した。
  - (一) 収集したもの
    - 古文書、地誌類、紀行文、古絵図類や明治時代の実測図など。
  - (二) 調査した事項
    - ア 道及びこれに沿う地域に残る遺跡の分布状況と保存の実態。
    - イ 江戸時代の国界・藩界及び郡名
- 三、本調査の調査員・補助員は左記のとおりである。
  - 主任専門調査員 草間 俊 一 岩手大学教授
  - 専門調査員 細井 計 岩手大学教授
  - 専門調査員 吉田 義昭 盛岡市教委文化財専門員
  - 地区調査員（一関市） 千葉 一郎 一関市文化財調査員
  - 地区調査員（東山町） 小野寺 一郎 東山町文化財調査員
  - 地区調査員（人束町） 菊池 裕 紀 大東町文化財調査員
  - 地区調査員（陸前高田市） 宗 宮 泰治郎 前市立博物館長
  - 補助員 高橋 哲郎 岩手大学文部技官
- 四、調査の方法は、地区調査員が調査カードを作成し、調査カードにもとづき専門調査員が確認調査を行なった。
- 五、本書は、専門調査員細井計が執筆し、文化課が編集にあたった。

# 目次

序

岩手県教育委員会教育長 新里 盈

例言

一 今泉街道について

..... 7

二 街道の現状と文化財の保存状況

..... 8

三 街道筋に残る主な文化財

..... 27

写真

..... 31

地図

..... 37

## 今泉街道について

奥州道中の山目宿を起点として東に進み、仙台藩西磐井郡の中里・作瀬、東磐井郡の舞草・相川の各村（以上一関市）を經由し、さらに松川・長坂（東山町）・摺沢・大原（大東町）の四宿駅を通過し、笹ノ田峠を越えて気仙郡に入り、矢作村（陸前高田市）から今泉宿（陸前高田市気仙町）へと通じる道筋が、今泉街道とか、気仙街道などと呼ばれていたものである。これらの呼称のうち、本報告では今泉街道を用いることにする。

ところで、江戸時代の奥州道中は、厳密な意味では、宇都宮宿の次の白沢から奥州白河までの一〇宿であり、白河以北はその延長とみなされていた。したがってそのような観点からすれば、万延元年（一八六〇）に仙台藩が

「是迄四割増之上三割増、都合七割増」の人馬賃金を願出たのに対して、幕府勘定奉行名で、脇往還<sup>正</sup>、右体多分之割増相添候先例無之、殊々割増年奉中因窮之中立を以、此上再割増被 仰付候由者、外轉<sup>正</sup>も相成可中哉<sup>ニ</sup>付、願之趣旨不被及御沙汰旨被 仰渡可奉存候」（『宮城県文化財調査報告書』第六〇集、傍点筆者、以下同じ）と、却下された文中に明がされているように、幕府は白河以北の奥州道中の延長線を脇往還（脇街道）とみなしていた。しかし、それが東北地方を縦断する幹線道路としての役割を果たしていたことは事実である。この幹線道路としての広義の奥州道中からは、多くの脇街道が分岐している。本報告で取扱う今泉街道もその一つである。

江戸時代の陸上交通を支配関係から一瞥すると、五街道（東海道・中山道・甲州道中・日光道中・奥州道中）が幕府道中奉行の管轄であったのに対し、その他の街道は、白河以北のいわゆる奥州道中をも含めて、幕府勘定奉行の支配するところであり、それは下として貨錢などの統制面にかかわる点

であった。そのため、街道の普請・橋梁の修理・並木の保護などの実際面にかかわる点は、沿道の大名や旗本といったそれぞれの領主の管理にゆだねられていた。したがって、今泉街道は仙台藩（一部一関藩）の管理するところであり、その実際面は沿道の村々の責任で行なわれていたわけである。

この今泉街道について、次に、わずかな史料をとおして簡単に触れてみることにする。まず、山目宿（一関市）から今泉宿に至る道筋については、これがいつごろ開発され、その後どのような変遷を経て改良整備されてきたのか、史料的にその間の経緯を明らかにすることは不可能であるが、明治四年の「岩石集記録」をみると、「気仙街道、磐井から長坂・大原を経て気仙に至る。途中四駅」とあり、また明治期の「区費例則」にも、「気仙街道、磐井より長坂・大原を経て今泉に至る。」と記されている。

この道筋は元禄二年（一六九八）の「東山御草村絵図」・「相川村絵図」・「松川村絵図」・「長坂村絵図」・「摺沢村絵図」・「大原村絵図」、さらに、元禄一二年（一六九九）の「矢作村絵図」と伝えられているものなどによっても確認できる。しかもこのようなルート、すなわち、山目宿から松川・長坂・摺沢・大原等を経て今泉宿に至る道筋は、すでに近世初頭にはほどこあがっていたようである。たとえば、今泉街道の宿駅の一つである摺沢宿は、天正年間の本宿から引町して成立したものと伝えられているし、隣の宿駅である大原宿については、「代敷有之御百姓書出一に、九代相統、一市町屋敷檢断軍蔵」の先祖で三代目の治部之助は、「慶長年中大原町始り之節々検断御用相勤候由中伝候得共、在役年数相知不申候事」と記されているので、慶長年間の町立であったように思われる。また、今泉街道の終着駅である今泉宿は、安永四年（一七七五）の「風土記御用書出一によれば、寛永一九年（一六四二）の検地以前からの町場であると伝えていた。したがって、これらの記述からすれば、今泉街道のおおよその道筋は、慶長・元和のころにはほぼ確定されたものと考えられる。

次に、街道の呼称についてであるが、明治四年(一八七二)の「岩手県記録」・明治期の「区費例則」などをみると、「気仙街道」とあり、同二年(一八九〇)の岩手県道路改修案(実現しなかった)には、「今泉街道」と記されているので、明治期には「気仙街道」とか、「今泉街道」と呼ばれていたことがわかる。そして明治後半以降になると、大体「今泉街道」の呼称が一般的に用いられていたようである。

安永四年(一七七五)に提出された各村の「風土記御用書出」によれば、作瀬村(一関市)では「当郡(西磐井郡、筆者注、以下同じ)山日町<sub>五</sub>東山松川町<sub>二</sub>之道、道法大数小道、山日町<sub>五</sub>廿三丁隄、松川町<sub>五</sub>拾六里程」と記している。また、相川村(一関市)では「当郡(東磐井郡)長坂町<sub>五</sub>西磐井山之日町<sub>五</sub>之道、筋、道法御村境<sub>六</sub>小道、長坂町<sub>五</sub>五里半程、山ノ日町<sub>五</sub>十二里程」、矢作村(陸前高田市)では「道巻筋、七<sub>八</sub>東山大原町、下<sub>八</sub>当郡(気仙郡)今泉町<sub>五</sub>之道、右道法当村境<sub>六</sub>小道、大原町<sub>五</sub>拾五里、今泉町<sub>五</sub>三里」と述べている。これらの記述からすれば、当時の街道については、それぞれ目的の地名をつけて、「どこどこ」の道一というものが一般的な呼称であった。このことは、今泉街道沿いにある道標からも指摘できる。たとえば、宝暦期のもと思われる栲木の道標には、一東<sub>八</sub>(欠損……今泉高田道カ)、南<sub>八</sub>鹿折気仙街道、西<sub>八</sub>生出入原道」とあり、折坂の絵入り道標(江戸期)にも「南<sub>三</sub>するさわ、(右)さる沢道、十二里」と刻まれている。今泉街道とは直接関係ないが、文化八年(一八一二)建立の桃の木洞入口の道標は、「左<sub>三</sub>さるさわ道おきた道、うしろは正法寺道、むこう<sub>三</sub>へするさわ道、右<sub>八</sub>ななかさ道」と、猿沢・奥田、正法寺、摺沢、長坂の各地へ通じる道を案内している。したがって、今泉街道を目的の地として広くとらえる場合には、「今泉町<sub>五</sub>之道」という意味で、今泉街道と呼ばれていたものと思われる。最後に、里程について一言触れておこう。摺沢村(大東町)の「風土記御用書出」をみると、「当郡(東磐井郡)長坂町<sub>五</sub>一里拾五丁、……以上七ヶ

所、里数何も大道を以御書上仕候事」とあり、一方、舞草村(一関市)の「風土記御用書出」には「当郡松川町<sub>五</sub>西磐井山ノ日町<sub>五</sub>之道、巻筋、道法御村境<sub>六</sub>小道、松川町<sub>五</sub>十里、山ノ日町<sub>五</sub>五里」と記されているように、「大道」と「小道」の区別がみられる。仙台藩では概して主要道路を「大道」であらわし、その他の村道的なものは「小道」で表示している場合が多いようであるが、必ずしも統一されていたわけではない。たとえば、今泉街道の長坂宿(東山町)から摺沢宿(大東町)までの道法は、「大道」で「一里拾五丁」(「摺沢村風土記御用書出」)、「小道」で一八里三丁一(「長坂村風土記御用書出」)とあり、同、のルート(今泉街道)が「大道」と「小道」で表示されているのはその一例である。ここでは「大道」が「三六町」(「小道」が一里<sub>三</sub>六町の割合となつている。なお、「大道」が「三六町」をもって「里」としていたことは間違いないが、「小道」の方は統一されていないようである。たとえば、古川占松軒がその著「東遊雜記」の中で、「仙台城下より北方は、今に戎の風俗ありて万事異なること多く、行程も五町<sub>一</sub>里、六町<sub>一</sub>里、七町<sub>一</sub>里などと所どころにて件わりたるに、仙台城下より南は、行程も三十六町を以て「里」とし、……と指摘しているのはそのあらわれであろう。

## 二 街道の現状と文化財の保存状況

今泉街道は、関市山日町から陸前高田市気仙町(今泉)までである。ここでは、その間の街道の現状と文化財の保存状況について、次の区分にしたがって説明を加えることにする。

- (1) 山日<sub>五</sub>出舟者場跡(一関市)
- (2) 出舟者場跡<sub>七</sub>中里(一関市)

- (3) 中里ノ高ト峠(一関市)
- (4) 高ト峠ノ上の橋(東山町)
- (5) 上の橋ノ荒瀬・流矢(東山町)
- (6) 流矢ノ八幡前(大東町)
- (7) 八幡前ノ大原宿(大東町)
- (8) 大原宿ノ標合沢(大東町)
- (9) 標合沢ノ梅木(陸前高田市)
- (10) 梅木ノ下洞橋(陸前高田市)
- (11) 下洞橋ノ今泉宿(陸前高田市)

以上のうち、(1)・(4)の道筋は一部分を除いてはほぼ県道(一関大東線)と一致しているが、その他はいずれも県道や国道(三四三号線)と異なっている。とくに、ルーとの著しく変化しているところは(2)と(5)、それに大原宿の部分を除いた(7)の道筋である。

### (1) 山目ノ旧舟着場跡

奥州道中の山目宿から分岐する今泉街道(以下、旧道という)は、現在の県道一関大東線(以下、県道という)の起点より少し南の、一関市山目町一・二丁目の千葉家と田中家とが対面しているところを起点としている。旧道入口の左側にある住宅(千葉フジ所有)は明治中期の建築といわれ、格子戸や木欄などに宿場町の名残をとどめている。旧道の道幅は起点付近で二七〇cm、そこから約二〇〇m先で三三〇cmほどある。その間は旧道がそのまま市道として活用されている。その先の町裏から東北本線の敷地を横切る辺までは道が消え、その後はほぼ県道と重なって東進している。

権瀬橋の手前約四〇〇mの所で県道から左手に市道中里線が分岐しているが、その分岐点を越えた道の左側に、文政二年(一八一九)の塩釜大明神碑

(高さ一九〇cm、幅四六cm、厚さ二八cm、粘板岩)、文久三年(一八六三)の湯殿山碑(高さ一六〇cm、幅六〇cm、厚さ四三cm、花崗岩)、文化八年(一八一)の雷神寺(高さ八五cm、幅五一cm、厚さ一三cm、粘板岩)、慶応三年(一八六六)の山神碑(高さ一〇〇cm、幅六三cm、厚さ二〇cm、花崗岩)、文政三年(一八二〇)の庚申塔(高さ一三七cm、幅五二cm、厚さ一五cm)、文化三年(一八一六)の不動明王坐像(高さ一三〇cm、幅六五cm、厚さ二五cm、安山岩)がある。これらの古碑群は県道の拡幅工事の際、付近にあった古碑を現在地にまとめ、その台石を縦五四五cm、横二三〇cm、厚さ二〇cmのコンクリートに固定したもので、今後の保存は良好と思われるが、将来現在地が北上遊水地となった場合には、さらにその対策を考える必要がある。

この権瀬古碑群から約一km北西に千手観音堂がある。安永四年(一七七五)の中里村(一関市)の「風土記御用書出」(以下、「安永風土記」という)に、「一境内 堅七間、横六間、一堂 南向一間四面、一本尊 先年安永不仕候事」と記されているものである。棟札によると、現在の観音堂は文化一二年(一八一五)の建立で大工棟受小野源太夫、その後、天保六年(一八三五)に補修が加えられていることがわかる。昭和三年ごろに銅板に替えられたが保存は良好である。なおこの源太夫は、文化九年(一八一二)に赤荻村(一関市)の鎮守であった観音堂や文政一一年(一八一八)に中尊寺弁慶堂を建立した平泉高館の住人であり、当地方の有名な棟梁であった。この境内には文政七年(一八二四)の崎大明神碑(高さ八六cm、幅四〇cm、厚さ一〇cm、粘板岩)、寛政一二年(一八〇〇)の子安観音石像(高さ四八cm、幅三九cm、厚さ二二cm、安山岩)のほか、文政一三年(一八三〇)の五重石塔、嘉永六年(一八五三)の石燈籠があるが、五重石塔は昭和三年の宮城泉沖地震で倒れてしまった。これよりわずかな南の市道中里線に沿った三本木には、天明九年(一七八九)の雷神碑(高さ一〇三cm、幅九八

幅、厚さ三〇cm、安山岩)、寛政八年(一七九六)の塩釜大明神碑(高さ一三八cm、幅三四cm、厚さ二五cm、花崗岩)がある。

さて、欄額古碑群を過ぎて神明社を左に見やりながら、県道が欄額橋に向って右にカーブする辺から、旧道は逆に左手に入り北上川の舟渡場(欄額舟場)跡に至る。江戸時代の渡船地点は詳かではないが、現在の欄額橋から約七〇〜一〇〇m北の地点に、明治・大正時代に使用された舟場跡が残っている。旧道はここで北上川を渡り、対岸の舞草舟場跡から田圃の中を流んで県道と合流する。元禄二年(一六九八)の「東山舞草村絵図写し」(以下、「舞草村古絵図」という)によれば、この北上川の「舟渡」は「此道山ノ目へ出ル、舟渡巻町拾四間」とある。欄額橋から約一・五km東北に岩出沈床がある。これは大きな岩石(長さ一三〇cm、幅八〇cm、厚さ五〇cm)を川床に数段に敷き並べて、舞草地内に水が流入しないように施工したものである。「北上川」第一輯によると、寛政三年(一七九一)十一月、金三〇〇両をもって岩出に岩石を用いて長さ五三間(九五m)の渡路変更の沈床を築造した。そのため、舞草地区の旧河道は上砂で埋まり谷起となったという。江戸時代の北上川治水工事の一端を知らせてくれる珍しい遺跡である。北上川の洪水時になると支流に水が流入しなくなるので、現在は沈床の一部を破って通水用のコンクリート管が埋設されており、舞草地区九〇haの耕地を灌漑しているが、江戸時代の沈床工事の遺物として今後も保存を講じたいものである。

この岩出沈床の右手の細田には宇南権現社と縄文期の細田遺跡があり、さらに県道江刺一関線から市道蓬田線が分岐している地点に、天保九年(一八三八)の湯殿山大権現碑(高さ一四〇cm、幅五〇cm、厚さ五cm、粘板岩)、文化八年(一八一二)の大神宮碑(高さ一三四cm、幅五〇cm、厚さ五cm、花崗岩)、天保二年(一八四〇)の金華山碑(高さ一九〇cm、幅四〇cm、厚さ一二cm、粘板岩)、文化五年(一八〇八)の庚申碑(高さ一三三cm、幅七

六cm、厚さ六cm、花崗岩)などが左から一列に並んでいる。ここから約五〇〇m東北の龍ヶ沢に天台宗東光山観福寺がある。安永四年(一七七五)の同寺の「書出」には、

開山之事 当寺ハ了元開山ニ御座候矣、右年月相知不申候、了元代ノ第六世傳泉代迄貞言宗ニ御座候矣、第七世重國代貞享五年ハ天台宗ニ罷成申候事、故事未詳之事 当寺ハ舞草内野舞草ニ御座候事、本山井木寺之事 当寺ハ當郡西野中尊寺村中尊寺門中ニ御座候、但本寺無御座候事

最初之地移替之事 当寺ハ往高要寺と申所ニ有之候處、畑之内ニ而境内段ノ前庄候ニ付、寛永十五年古屋敷治左衛門地内内へ移替申候事

と記されている。ここには江戸期の阿弥陀如来坐像(木尊、長さ一尺七寸、台座一尺五寸三分、光背三尺)、天保十五年(一八四四)の不動明王立像、寛政三年(一七五三)の銅製鯛口、秘仏の観音像、安政六年(一八五九)の石燈籠(総高一六四cm)二基、文化七年(一八一〇)の大阿闍梨法印石像(総高二〇〇cm)などのほかに、天保四年(一八四三)の南無阿弥陀仏碑(高さ一五〇cm、幅一三〇cm、厚さ二〇cm)、文久三年(一八六三)の南無阿弥陀仏碑(高さ一四六cm、幅八七cm、厚さ三二cm、花崗岩)、享保一三年(一七二八)の三界万靈碑(高さ九〇cm、幅四一cm、厚さ二・三cm)などが山門付近に建っている。

さて、舞草船場跡からの旧道は欄額橋を過ぎた辺で県道と合流し、そのまま約八〇〇m進んだ地点で県道と分かれ、右手の田圃を横切って旧船着場跡に至る。古代か中世頃の北上川は、舞草西平付近から深沼を迂回して現在の欄額橋付近に蛇行して流れていたようである。「船着場」の名称はその頃の名称といわれている。天保六年(一八三五)の「舞草村作瀬村の藤後谷起並に窪谷起新田境界確定仮絵図」なるものによれば、舞草西平付近で北上川支流をつき破り、深沼を経て欄額橋下流で北上川にそそぐ川を「古川跡」と記し、深沼付近が最も広くなっている。現在はわずかに深沼だけが「古川跡」

を認ばせてくれる。旧船着場跡には金華山（高さ一五〇cm、幅七〇cm、厚さ四〇cm）、金剛山（高さ二一〇cm、幅九〇cm、厚さ五〇cm）、湯殿山（高さ一二〇cm、幅九〇cm、厚さ一八cm）などの石碑（すべて花崗岩）があり、いずれも文久四年（一八六四）のものである。この古碑群から約二五〇m右手に舞草城（千草館）跡がある。一舞草村古絵図に「古館」とあり、「安永風土記」には「千草館、南北二十三間、東西三十八間、右御城土佐々木左衛門四郎様天正年中迄御住居之由申候事」と記されている。

## (2) 旧船着場跡ノ中里

旧舟着場跡の古碑群を過ぎると、旧道は左手に大きくカーブして登り坂（末舗表）となる。これが「虎地ヶ坂、長十八丁三十間」で、「当郡松川町よ当郡西岩井山ノ目町へ之通路」（「安永風土記」）である。虎地が坂を約二〇〇mほど登った旧道の北側五m位のところに、明治三三年（一九〇〇）の岩手県道路基標（地上の高さ三九cm、縦横各一八cm、花崗岩）がある。その正面には「岩手県」、右面に「No 40」、左面に「基標」、後面に「明治三十三年」と刻まれている。これによってみれば「岩手県道路改修案」の提出された明治二三年から一〇年後にして、ようやく現在の県道を經由するルートでの改修整備が完成し、同三三年に県道に編入されたわけである。したがって旧道の方は村道となり、その後、昭和三〇年市道に編入されて今日に至っている。道路基標から少し行った旧道の左側に文化三年（一八〇六）の庚申碑（高さ一一〇cm、幅九〇cm、厚さ二〇cm）、寛政元年（一七八九）の不明碑（高さ一七〇cm、幅一四cm、厚さ二五cm）、文化二年（一八一五）の庚申碑（高さ一三六cm、幅六〇cm、厚さ三七cm）があり、いずれも花崗岩を用いている。これらの古碑がある谷地々内は旧道の面影がよく残っているところである。ここから約五〇〇m左手の西平には、天保六年（一八三五）建立

の薬師堂と羽場城跡があり、ともに「舞草村古絵図」や「安永風土記」に記載されているものである。「西山家古留」によれば、薬師堂は吉祥山東城寺の脇院として建立され、「瑠璃光院峰薬師堂」と称し、宝永二年（一七〇五）現在地に移転されたという。ここには「奉修鎮守西峯山薬師如来国家安全永久守護依（以下略）」（表）、「宝永乙酉式年九月吉祥日」（裏）と記された板札が保存されている。

谷地古碑群から約五〇〇m虎地が坂の旧道を登ると、享保二年（一七一七）の愛宕大権現碑（高さ、五〇cm、幅八七cm、厚さ二五cm、花崗岩）が左側にあり、そこを過ぎる頃から旧道は急勾配となる。そこで、三年ほど前から道を蛇行させて勾配の緩和を図る拡幅改良工事が進められているので、旧道は四か所におたつて切断されている。この辺の旧道の幅は二・七m、拡幅改良工事後の道幅は五mで砂利敷舗装となっている。ここから約一km北の蓬田に天神社がある。「舞草村古絵図」に「天神」と記載され、「安永風土記」に「一社地、南北四間、東西三間、一社、南向一間作、一祭日、九月九日」と説明されている。同社の石鳥井の傍に文政二年（一八二九）の石燈籠（総高一三〇cm、宝珠欠損、安山岩）、一基、境内に安政三年（一八五二）の石燈籠（総高一六〇cm、安山岩）二基、文化八年（一八一八）の雷神塔（高さ一五〇cm、幅七〇cm、厚さ一四cm、花崗岩）が建っている。なお、この天神社は別名を「豆から天神」とも称している。蓬田氏の話によれば、蓬田藩落では五穀豊穡を感謝する意味で毎年旧暦九月九日に枝豆を奉納し、みんなでそれを食べて帰るので豆からだけが残るところから「豆から天神」といわれているとのことである。「岩手叢書東山」にも「豆から天神社、在舞草、祭日九月九日」と記されている。

さらに、旧道の面影を良く残している虎地が坂を登って行くと、やがて道場峠に達する。ここは江戸時代の舞草村と相川村（ともに一関市）の境にあたり、標高約二〇〇m余の高所となっているので交通の難所でもあった。

「舞草村古絵図」によると、この峠の手前約五・六〇〇mのところは一里塚の記載があるが、現在はその痕跡すらとどめていない。道場峠の北側斜面の丘上に一基からなる古碑群が建並び、壯麗な眺を呈しているが、そのうちの主なものは文化一三年（一八一六）の庚申碑（高さ一三〇cm、幅九〇cm、厚さ三二cm）、安永九年（一七八〇）の春日参御時大明神・横山不動尊碑（高さ一三〇cm、幅七三cm、厚さ五〇cm、花崗石）、文政元年（一八一八）の子安観音碑（高さ一二〇cm、幅九〇cm、厚さ二七cm）などである。

道場峠を越えたと旧道はくんだり坂となる。峠に至る旧道の登り坂を「虎地ヶ坂」というのに対して、くんだり坂を「道場坂」という。相川村の「安永風上記」に、「一道場坂 長式丁、当郡長坂町々西磐井山之目町市の通路」とあるのがそれである。峠から約五〇〇mだった旧道の右側に弘化二年（一八四五）の三世諸仏供養碑（高さ一・八m、幅六六cm、厚さ三五cm、安山岩）、文政二年（一八一九）の横山塔（高さ一・五〇m、幅七〇cm、厚さ二〇cm、安山岩）、同一二年（一八一九）の庚申供養塔（高さ一二五cm、幅三六cm、厚さ三三cm、粘板岩）、寛政一三年（一八〇二）の清水観世音碑（高さ八〇cm、幅四〇cm、厚さ二〇cm、安山岩）、嘉永七年（一八五四）の庚申塔（高さ六四cm、幅六五cm、厚さ一五cm、安山岩）が建並んでいる。旧道はこの辺から舗装されて一関市農協舞川支所付近へと東進しているが、その途中の山人に立派な等松が一本生えており、松並木の名残を偲ばせてくれる。さらに東進すると北側に南地藏尊堂と山ノ神社があり、とくに前者は「一地藏堂」一小名 南、一勧請 誰勧請と申儀并年月共相知不申候事、一境内 南北五間、東西五間、一堂 辰巳向を間半四間、（中略）一祭日 三月二十四日」と、「安永風上記」に記されている。

弘化二年（一八四五）の改築になる南地藏尊堂には、「元和四年九月二四日」と記された棟札（長さ七五・三cm、松材）があり、これは一関市内の棟札中最古のものである。そのほか寛政九年（一七九七）の地藏菩薩立像（木

造、高さ六〇cm）と庚申塔（高さ一六〇cm、幅五四cm、厚さ三〇cm、安山岩）がある。ここから約七〇〇m北方の沢尻に菅原神社がある。元禄一二年（一六九八）の「相川村絵図」（以下、「相川村古絵図」という）に「天神」と記載されているもので、「安永風上記」は次のように説明している。

一村野守天神社

一小名 天神

一勧請 誰勧請と申儀并年月相知不申候事

一社地 南北六十間、東西二十六間、一社 東西四間

一地主 惣領宮原野人伊右衛門

一別当 羽黒派大光院

一祭日 六月二十五日、九月二十九日

この本殿は、「奉建立天満宮村中安全本願王家内安全子孫長久如意之故、于時明和七年庚寅天閏六月二十五日、本願主伊藤仲右衛門（以下略）」とある棟札によって明らかで、明和七年（一七七〇）の建立になるすぐれた建物である。境内には明和三年（一七六六）の石水鉢（総高八六cm、安山岩）一基、寛政六年（一七九四）の石燈籠（総高一四四cm、安山岩）一對、同一年の狛犬一対があり、さらに参道入口付近には、嘉永七年（一八五四）の石燈籠（総高二五八cm、安山岩）、天明六年（一七八六）の庚申塔（高一七二cm、幅九二cm、厚さ一四cm）、文政一三年（一八三〇）の御崎宮碑（高一二六cm、幅七八cm、厚さ二〇cm）、元文五年（一七四〇）の庚申供養碑（高一二〇cm、幅一六〇cm、厚さ三〇cm）、文化一四年（一八一七）の牛頭天玉碑（高さ一四五cm、幅一〇〇cm、厚さ二〇cm）、弘化三年（一八四六）の金剛山碑（高さ三〇〇cm、幅一三〇cm、厚さ四〇cm、以上いずれも花崗岩）、安政二年（一八五五）の湯殿山碑（高さ一六〇cm、幅七三cm、厚さ二二cm、粘板岩）が林立している。その中でもひととき大きな金剛山碑は、相川村計入伊藤新右衛門の催しで建立されたもので、頼三樹三郎（山陽の第三子）が二才の時、西磐井郡山日村の大槻野浜を訪ねた際、たまたま相川

村の内田氏宅を訪問した時に揮毫したものと伝えられている（『舞川のあしあと』）。そのほかでは嘉永三年（一八五〇）奉納の算額、同六年寄進の随神二体がある。

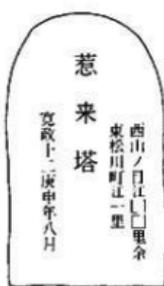
### (3) 中里（高卜峠）

舗装された旧道は、関市農協舞川支所付近で県道と合流するが、その地点よりわずか手前で右に分岐する道があり、その付近に「山路米て何やらゆかしすみれ草」と刻まれた芭蕉句碑（高さ三〇〇cm、幅七〇cm、厚さ二〇cm、粘板岩）が建てられている。ここには芭蕉は来っていないが、文化一四年（一八一七）に新妻斎右衛門が翁を慕って建立したものとされている。そのほか忠比須石像（高さ二二六cm）、大黒石像（高さ二二〇cm）、千手観音像、雷公天碑などがある。

旧道はこれらの石碑のところから古民家（須田家）の前を通って小塚に至り、市道奈良坂線と合流している。合流点付近の旧道の南側に寛政九年（一七九七）の庚申塔（高さ一三三cm、幅四八cm、厚さ二〇cm、花崗岩）、文化二年（一八〇五）の紀蛇塔（高さ二二八cm、幅七〇cm、厚さ三〇cm）があり、その南側の丘陵北端の小さな塚の真中に五重塔が建てられている。塔は水輪（高さ二二cm）と火輪（高さ一三三cm）だけ残り、地・風・空輪は見当らない。小さな塚は金亮古次の六部供養とも、墓とも伝えられているが（『関市史』）、詳細はわからない。五重塔から約五〇m北方の中里には、「相川村古絵図」に記載されている曹洞宗龍溪山常川寺がある。「安永風土記」に「一仏殿 南向、南北六間半、東西八間、一本尊 阿弥陀如来、木仏坐像、御長一尺一寸、往古里民黒仏と中昭異仏。御座候由中伝候事」と記されている。ここには「黒仏」といわれる阿弥陀如来像（身長二〇cm、光背二五cm、台座一〇cm）、「不許輩酒入山門」と刻まれた文政一一年（一八二八）の戒壇石

（高さ一四〇cm、横二五cm、横三〇cm）、天保三年（一八三二）の象頭山碑（高さ一〇三cm、幅七〇cm、厚さ三二cm）などがある。常川寺の西側にある内田家は縁側の天上をせがいで造にした立派な建物であり、とくに、願三樹三郎が来遊したゆかりの居宅として知られているが、彼に関する資料は残されていない。常川寺から約三〇〇m右手の水の上に二十五尊堂がある。ここには寛政一一年（一七九九）奉納の二十五尊像（木像彩色、坐高一〇一・五cm）が完全に揃っているほかに、天和三年（一六八三）の神鏡台（総高四一cm）、寛政一一年の風神・雷神（二十五尊像の守護神）・ローソク立などがあり、当時の信仰を知る貴重な文化財といえる。

さて、市道奈良坂線との合流点からそのまま約四〇〇m東進した地点で、旧道は市道から分かれて左手に進み県道と合流する。反対に右手の市道（旧松川・前沢街道）を進むと、一関市と川崎村との境である奈良坂峠に至る。この分岐点には、次のような寛政一二年（一八〇〇）の道標があり、その対面に旧道をはさんで天保一四年（一八四三）の金毘羅大権現碑（高さ一一〇cm、幅六五cm、厚さ四〇cm）が建てられている。



右の塔に刻まれている「葱来一」の意味は不明であるが、山目と松川までの里程が記されているので、道標であることは間違いない。相川村の「安永風土記」をみると、「道式筋」として次のように記されている。

当部長坂町より西岸井山之目町立の道、一筋 道法、御村坂より小坂、長坂町立五里半程、山ノ目町立二里程

当部松川町より伊沢郡前沢町立の道、一筋 道法、御村坂より小坂、松川町立四里程

県道と合流した旧道はすぐ分かれて右手の田圃の中を進み、外大久保の吉田家門付近で県道を斜に横断して、狭山隧道の北方の竹木坂を登る。「安永風土記」に「竹木板、長四丁、当郡長坂町西野井山之口町正の通路」とある。約五〇〇m進んだ高ト峠には、相川と松川との境界のコンクリート杭（市町村界標）、高さ四五cm、縦横各一〇cm）がある。また旧道北側の崖上に寛政一〇年（一七九八）の石碑（高さ一三〇cm、幅六〇cm、厚さ三〇cm）があり、その中央には「南無阿弥陀仏」、右側に「寛政十戊午年羅供養」と刻まれている。峠付近の旧道の幅は一・二mあるが、明治三三年（一九〇〇）以降降道となったため、藪草が繁茂して歩いて歩行は困難な状態である。外人久保の吉田家は同家所蔵の由緒書によれば、天保一三年（一八四二）に初五〇俵・金一〇兩を仙台藩に調達して知行二六〇貫文を拝領し、同一五年にも金二〇兩を調達して四足門を頂戴している。現在この四足門には弘化二年（一八四五）の祈禱札が掲げられている。

なお、「竹木板」の呼称については、「安永風土記」に「竹木板」とあるので、初めは「たけ木板」といったものと思われるが、いつの間にか「たかぼく板」といならわされるようになり、現在は主として「高ト板」の字をあてている。

(4) 高ト峠上の橋

一関市と東山町の境となつていゝところが高ト峠であり、そこから約二〇〇mくだつた旧道の北側の山林中に、天明二年（一七八二）の庚申碑（高さ一六〇cm、幅七〇cm）がある。この辺一帯にあつた松並木は明治末期に伐採されたといふ。現在並木のあつた旧道沿を並木敷地と呼んでいる。庚申碑からさらに約三〇〇mくだつた旧道の北側約二〇〇mのところに行人塚がある。

この塚にまつわる伝説によれば、昔この地方にいつもやってくる行者がこの付近で行き倒れとなつたので、その死を悼んだ村人達は近くに墓に埋葬し、塚を築いて冥福を祈つたという。その塚が行人塚と呼ばれて百日咳の神様として有名で、最近まで近郷近在の信仰をあつめていたといふことである。

この行人塚を過ぎて約二〇〇mくだつた地点で県道を横断している旧道は、ふたたび県道がヘアピンカーブしている付近を二度横断し、その先県道の右側に沿つて進むと松川からの高ト坂登り口に達する。そこには文化四年（一八〇七）の庚申碑（高さ一四三cm、幅九三cm）、同五年の雷神碑（高さ一六一cm、幅七六cm）、文政四年（一八二一）の金華山碑（高さ一七二cm、幅八二cm）、同七年の南無阿弥陀仏碑（高さ一三五cm、幅六二cm）が右から一列に並んでいる。これらの石碑群から約二〇〇m南西で県道がヘアピンカーブしている付近の滝之沢に、寛政九年（一七九七）の奉書大乗妙典、字一石碑（高さ六〇cm、幅四二cm）と年号不明の清水観世音菩薩門品偈の経文を二石に一字づつ記された石が昭和四〇年頃発掘されている。

さて、高ト坂登り口を過ぎて町道と合流した旧道は、そのまま町道を約三〇〇m行つたところで、県道東山花泉線と交叉してその右側を進み、ふたたび県道と合流して石字川（山谷川）に架る境橋に至る。ここが江戸時代の松川村と長坂村（ともに東山町）との境であつた。当時の橋は現在地より約四・五m上方に架けられていたといふ。境橋を越えて長坂に入つた旧道は岩手セメント工場の敷地をかすめて進み、その先は県道と取なつて長坂宿に入

る。「安永風土記」には次のように記されている。

一 当郡長坂町前沢有之、卷丁四拾八間御座候矣、他凡之宿次里數、左ニ御書上仕候事

一 西岩井郡山ノ口町五拾九里卷丁五拾間

一本馬 八拾八文、一輕馬 五拾八文、一負夫 四拾四文

(略)

一 当郡摺沢町五八里二丁

一本馬 三拾六文、一蘇尻 拾四文、一貫夫 拾八文

一 当郡松川町七里

一本馬 貳拾九文、一軽尻 拾九文、一貫夫 拾五文

以上六ヶ所、何れも里数小道を以て書上仕帳事

このように、長坂宿は旧道における主要な宿駅の一つとして位置しており、そのためここからは(1)「江刺郡黒石町之遺」、(2)「当郡(東磐井郡、以下同じ)母鉢町之遺」、(3)「当郡登沢町之遺」、(4)「当郡摺沢町之遺」、(5)「当郡松川町之遺」、(6)「西谷井山ノ目町之遺」といった六筋の道が分岐している。このうちの(1)(2)(3)の道筋が旧道にあたるが、とくに(1)には七カ所の坂があった。「風呂坂 長式丁、五輪坂 長三拾間、折ノ坂 長老丁、寺坂 長武拾間、大萱坂 長五拾間、荒井瀬坂 長老丁、高金坂 長四拾五間」とあるのがそれである。

長坂宿から農協の所までは旧道が県道と重なって走っているが、その間の町裏には熊野神社があり、ここは村の鎮守であった。「安永風土記」には次のように記されている。

一 村鎮守熊野社

一 小名 坊

一 勧請 葛西御家臣当村新次主千重判部少輔藤田助清表氏、熊野山万福寺と申洲

一 御願 依由申候鳥、右年月并別当所跡共ニ相知不申候事

一 社地 南北拾八間、東西六間 一 礼 南向武間作

一 別当 当村羽津派千重院

一 祭日 九月九日

右御祭礼之節為替國、大原御足軽式人妻相付候事

この神社の境内には明和三年(一七六六)の庚申塔、寛政五年(一七九三)の石燈籠のほか、文化・文政・天保などの石碑が多くある。一方、砂鉄川に架る上の橋の辺は角渡しであったが、その痕跡はまったくない。ただ、砂鉄川対岸の上の橋の左たもとが舟場跡であり、その近くの二軒の家が「角

場」の屋号で呼ばれている点から、わずかに往時を想ふのみである。上の橋の右手の水田などになっている所は、「お蔵場」と通称されており、「安永風土記」に「御蔵場老ヶ所、一田中、磐石御蔵式ツ」とある御蔵場跡である。上の橋から約四〇〇m北側に、長坂の町から砂鉄川を隔てた真向いの館といわれる丘陵がみえるが、そこが駆引城(鎌引城)のあった所である。これについて「安永風土記」は、

一金堀、横引城、南北三拾四間、東西貳拾六間、一寺ノ上、西御館、南北貳拾七

間、東西拾七間

右兩所共、御城主葛西御家臣千重判部少輔藤田之田中佐候鳥、年月相知不申候事

と述べている。

### (5) 上の橋と荒瀬・流矢

旧道は上の橋を過ぎた農協の所で県道と分かれて右手の町道を迂回し、本町橋右側の川沿の路傍に建っている寛政六年(一七九四)の庚申碑(高さ六〇cm、幅八〇cm)の辺から猿沢川を渡り、坂道を登って大船渡線の敷地を横断して久保へと向い、柴宿駅の南七〇ノ八〇mの所を通り、ふたたび線路を横断し、さらに県道を横切って館舎へと進んでいる。そして、この先ずつと県道と異つたルートを進んで行くわけである。

本町橋右側の庚申碑から約二〇〇m北にある沢の入り道路路には、明和三年(一七六六)の庚申供養碑(高さ一八〇cm、幅九〇cm)など、一基の古碑群が県道に南向して並んでいる。ここからさらに二〇〇mほど北に曹洞宗城高山安養寺があり、その開山は慶長二年(一五九七)、現在の本堂は文政二年(一八二九)の建立と伝えられている。安永四年(一七七五)の同寺の「書出」によれば、「一湖山之事、当寺ハ江刺郡黒石村大柳枯花山圓通止法寺第拾式世親室良盛和尚慶長貳年八月開山ニ付、当安永四年迄百七拾九年。

歴成候事、一小名之事、館下、一本山并末寺之事、本山ハ江刺郡黒石村大梅枯花山園通正法寺・御座候、但末寺無御座候事、一古キ什物之事、一本尊阿弥陀如来一体(木仏座像、御長卷尺七寸)とある。

安養寺の入口には享保三年(一七二八)の地藏尊板碑(高さ一〇五cm、幅六〇cm)、寛政元年(一七八九)の庚申碑(高さ一五〇cm、幅一二〇cm)があり、そのほか寺の入口や總門付近の前庭などに、享保、宝暦、明和、安永、寛政などの古碑や石像が数多く建っている。安養寺から約四〇〇m奥の狭川に沿った断崖の洞窟内に、古くは子安観音と称されたマリヤ観音像(高さ六五cm、幅三五cm、板碑)が安置されている。仙台藩のキリシタン遺物の一つといわれている。ここから約五〇〇m西側の所姫館山の頂上には、東西約六〇m、南北約四〇mの唐刺館の本丸跡があり、その西方の上壇上に初代頼胤供養碑(高さ一六〇cm、幅三五cm)が建っている。この古碑について「安永風土記」は、

一唐刺館、古碑、高五尺五寸、幅三尺四寸、右碑面之文字左ニ御宮上仕候、外ニ月二星之紋御座候、年月等見分不申候事  
二唐刺館前羽林次所頼山風公大居士  
千葉介平頼胤 從四位下少将

と記している。こことは逆に、マリヤ観音像から約八〇〇m東側の南整井里に、文化八年(一八一二)の桃の木洞入口の道標がある。これは旧道筋のものではないが、貴重な文化財なので紹介しよう。道標の中央上部に地藏尊が刻まれており、その下に次のような道が記されている(括弧内は筆者、以下同じ)。

左ハさるさわ道おきた道  
うしろは正法寺道  
むこうハするさわ道  
右ハなかさか道

さて、前述のごとく、旧道は大舟渡線柴宿駅の南七、八〇mの所を走って

いたわけであるが、柴宿駅から約二五〇m手前の旧道の北側に愛宕神社の祭場があり、その正面に寛政九年(一七九七)の塩釜・竹駅・横山大明神碑(高さ一一〇cm、幅六〇cm)、文化一四年(一八一七)の山神碑(高さ一一〇cm、幅七〇cm)、万延元年(一八六〇)の金華山碑(高さ一五〇cm、幅六〇cm)、年号不明の湯殿山・月山・羽黒山碑(高さ一九五cm、幅一〇〇cm)、八聖山碑(高さ一七五cm、幅一〇〇cm)、古峰神碑(高さ一六五cm、幅六七cm)があり、祭場の左側には安永三年(一七七四)の巳巳供養碑(高さ一一〇cm、幅八〇cm)、明和七年(一七七〇)の庚申碑(高さ一〇五cm、幅六〇cm)、文政五年(一八二二)の庚申碑(高さ一三〇cm、幅七五cm)、安政二年の庚申碑(高さ七〇cm、幅四五cm)、明治二年(一八七九)の馬標神碑(高さ八五cm、幅四〇cm)などが右から一列に並んでいる。これらの古碑群は柴宿団地内にあるため保存良好である。なお、東山町内には四基(長坂地内に一基、松川地内に二基、田河津地内に一基)の馬標神碑があるが、いずれも明治・大正時代のものである。同じ馬の守護神でも町内には馬頭観世音碑が多く、庚申碑に次いで第二位であり、以下、山神碑、雷神碑、南無阿弥陀仏碑の順となっている。庚申碑が一番多いのは作神信仰によるもので、昔の人々がいかに作況を心配し、豊作を神に祈っていたかが良くうかがえる。

柴宿駅から約二五〇m東側で大舟渡線の敷地を横断し、つづいて旧道を横切って進む旧道は、県道から左手に分岐して狭谷へ向う道と一部重なり、やがてそれから右に分かれて館合地内の町道を進んで行く。この館合地内にはまず千葉院の古碑群がある。享保一四年(一七三三)の奉念庚申塔(高さ七五cm、幅五五cm)、嘉永四年(一八五二)の天神宮碑(高さ一〇〇cm、幅五五cm)、天保二年(一八三一)の大黒天碑(高さ一〇〇cm、幅七〇cm)、同三年の庚申碑(高さ九五cm、幅五五cm)などがその主なものである。

千葉院は、安永風土記に、「一小名 長根、羽黒派、一道路 南面堅三間、横式間、一本尊 不動明王、木仏立像、御長卷尺五寸、薬師如来、木

仏立像、御長卷尺式寸、右二体共慈覺大師御作之山中伝候事」とあるように、昔は羽黒修験の道場であった。ここから約一〇〇m進んだ旧道の右傍に文政八年（一八二五）の庚申碑（高さ一一〇cm、幅二〇cm）、同年の西園三十三願札塔（高さ一六〇cm、幅六〇cm）、同九年の子安観音・湯山山神碑（高さ五五〇cm、幅五〇cm）のほか、年号不明の庚申碑二基（一つは高さ一〇〇cm、幅四〇cm、他の一つは高さ一一〇cm、幅八〇cm）が建っている。さらには約二〇〇mの間隔を置いて西館跡と東館跡がある。現在前者は畑地、後者は雑木林となっている。「安永風土記」には、「たて合、東館、南北武拾間、東西拾五間、一阿所、西館、南北三拾間、東西拾五間、……御城主并年月共相知不申候事」と記されている。ここから約二五〇m進むと里前地内に善龍寺がある。同寺の「書出」には、「一開山之事 当寺ハ南部領志和郡松山村大光寺周郡仲易和尚文明十一年湖山一付、当安永四年迄三百年ニ罷成候事、一小名之事 清水ノ上、一本山并末寺之事 本山ハ南部領志和郡松山村大光寺。御座候、但末寺無御座候事、古什物之事、一本尊、阿弥陀如来岩体（木仏立像、御長尺五寸、聖徳太子御作之由申候）」と記されている。

以上のように、曹洞宗龍沢山善龍寺は文明十一年（一四七九）の開山と伝えられ、現在の本堂は文政二年（一八一九）の建立になるものである。本尊の阿弥陀如来立像は頭部が柱材で室町期のもので、体部は檜材を用い、しかも、光背裏に記された仏工染師等の銘から慶長十三年（一六〇八）に補修されていることが知られる貴重な文化財である。境内には一〇数基の碑・像などがあるが、その代表的なものは元禄八年（一六九五）の南無阿弥陀仏碑（高さ一〇〇cm、幅四五cm）と文政十一年（一八二八）の芭蕉句碑（高さ一一〇cm、幅五四cm）である。とくに前者は東山町長坂地内の有年号の石碑のうちで最古のものであり、後者の句碑は上部の約三分一が折れていたものを見

住職が修理結合したもので、まぎ小懸足這上るしむづ哉 芭蕉」と刻まれている。これは当寺・八世玄端代の文政十一年（一八二八）に、この地を訪ねた江戸の俳人松風の首唱によって近郷の俳人達が相寄って建立したものである。この古碑群から約五〇〇m北西の五輪坂の上には年号不明の道祖神（高さ七〇cm、幅一七cm）、文化二年（一八〇五）の大乗妙興西園願札（高さ一一〇cm、幅四五cm）、寛政二年（一八〇〇）の夜念仏供養（高さ一一〇cm、幅七〇cm）、同四年の山神（高さ一〇〇cm、幅六五cm）、天明七年（一七八七）の天神宮（高さ五〇cm、幅二〇cm）、同年の大黒天（高さ一一〇cm、幅七〇cm）などの石碑が右から一列に並んでおり、さらに道祖神碑の右側にも、奉供養念仏五百方辺為、切衆生成仏碑、西園三十三番願札塔、秋葉大権現碑が建っている。これらの古碑群は昭和五二年の道路拡幅工事の際に、現在地より約五〇m南にあったのを移転したものである。

一方、善龍寺から約五〇〇m東の太田には、天正一八年（一五九〇）萬四の臣千葉風村の勧請と社記に伝える火産靈神社がある。神体は八面大荒神で柱材を用い、中世以前の作のようである。「安永風土記」には、「荒神社、一社地 南北四間、東西三間、一社 西向三尺作」と記されている。現在の堂宇は昭和一六年の造営で、土地の人々は荒神様と敬称している。ここには、「無別録」を著された仙台藩の字学芦東山の奉納された「八面大荒神」の扁額のほか、長坂の生んだ俳人鈴木東葉が文化七年（一八一〇）に奉納した句額があり、それには「八つふさの様の花の香身にぞしむ 東葉」と記されている。さらに石段の登口に文化十三年（一八〇六）の石燈籠（総高さ三三〇cm、花崗岩）、対、境内に享和三年（一八一三）の石燈籠（総高さ一五〇cm）一対が建っている。この神社から約三〇〇m東北に観音堂があり、その境内には文政十一年（一八一九）の雷神碑（高さ七〇cm、幅四〇cm）、延享元年（一七四四）の奉念庚申供養塔（高さ七〇cm、幅四〇cm）、年号ともに不明の碑（高さ一〇〇cm、幅三〇cm）、慶応四年（一八六八）の子安観音

碑（高さ八五cm、幅七〇cm）、天明□年の横山不動尊碑（高さ一〇五cm、幅四〇cm）が並んでいる。

ところで旧道は、前述のごとく、館合から里前にかけて県道の北側を迂回して善徳寺付近に至り、その先は県道の北側を流れる砂鉄川と大船渡線の線路にはさまれた部分を約八ノ九〇〇m東進し、そこで線路を横断するが、その手前までの約六〇〇mほどの区間は道も定かではない。その先の旧道は町道と重なって荒瀬・流矢に達している。

荒瀬地内には、まず高金坂の上の左手の林の中に安永八年（一七七九）の馬頭観音碑（高さ二一〇cm、幅八〇cm）、□「六年の庚申碑（高さ九〇cm、幅五〇cm）、天保三年（一八三二）の庚申碑（高さ一四〇cm、幅七〇cm）があり、旧道筋であったことを物語っている。この碑の所から坂道をくだって右手に入っていくと、長坂（東山町）と摺沢（大東町）との旧村境を流れる沢に出る。この沢と旧道にはさまれた部分に寛政六年（一七九四）の判読不明碑（高さ九八cm、幅六六cm）が建っている。この付近には明治後期まで茶店があって、往來の人々が休憩したということであるが、今はその痕跡すらとどめていない。

## (6) 流矢ノ八幡前

長坂と摺沢との境界を流れる沢に架けられた土橋を渡ると、旧道は大東町に入り、町道と重なって約八〇〇m進んだ地点で砂鉄川を右に横断し、その支流の曾慶川が合流する付近の旧道の北側に弘化四年（一八四七）の渡船碑（高さ一〇八cm、幅五〇cm、厚さ三五cm、花崗岩）が建っている。それには「為観光院貞花妙室大陸開聽得解加藤茂孝室造新舟以旅客便易往復」と刻まれている。渡船場であったことが知られるが、日常は一本橋が架けられており、出水時に舟で渡ったという。ここから坂道となる旧道は樹木におおわれ

ており、昔日の面影が良く残されている。そして大船渡線の敷地の北側に沿って約三〇〇m進んだ民家の前で線路を右に横断し、さらに県道の北側を流れる曾慶川の左岸に達し、そこからふたたび線路を斜断して摺沢駅の後方を通って市街地に入っている。その間の雲南田に寛政二年（一八〇〇）の庚申碑（高さ一三八cm、幅九六cm、厚さ二一cm、花崗岩）と雲南神社があり、礼田には明和七年（一七七〇）の庚申碑（高さ一二九cm、幅八九cm、厚さ三六cm、安山岩）のほかには三基の古碑と石燈籠一基がある。

摺沢の市街地に入った旧道はほぼ町道と重なって東進し、大船渡線路を横切った辺から、国道三四三号線（以下、国道という）と線路の中間を東南に進んで摺沢宿に至る。ここは天正年間に本宿から引町して成立したものといわれ、寛永検地当時は二四戸、その後享保年中に新町を足町し、安永四年（一七七五）には「町住居五拾九軒」となった。幕末の天保頃になると、約五〇〇m北に離れた石蔵（石倉）に引町を願出たが許可されなかったようである。摺沢村（大東町）の「安永風土記」をみると、次のように記されている。

一摺沢町宿場ニ御座候ニ付、町名丁敷当所ニ諸所在之宿次引敷共ニ、左ニ御書上在候事

一本町 老丁廿間、一町 老丁卅五間  
一当部松川町正三里四丁七間

一本宿七拾式文、一軒尻四拾七文、一貫大冊六文

一当部客館町正二里八丁五間（以下、略）

一当部千賀町正二里拾丁四拾間（以下、略）

一当部長坂町正、里拾五丁

一本宿二拾文、一軒尻廿四文、一貫夫拾八文

一当部松川町へ老里卅丁

一本宿四拾式文、一軒尻廿八文、一貫夫拾七文

一当部下折葉町へ四里廿二間（以下、略）

以上七ヶ所、里数何も大道を以御書上在候事

このように摺沢宿は、松川・築館・千厩・長坂・猿沢・大原・下折塚の各宿駅（の道（七筋）が分岐し、旧道における重要な宿駅であったと同時に、泷民・天狗田・曾慶・上奥玉・門崎・仏坂・濁沼・上折塚・長坂のうち生出の各村への村継の中心地でもあった。前記七筋の道のうち、松川・長坂・大原への道筋が旧道にあたる。そして摺沢宿の手前で直角に東北に折れる旧道は、八丁館大手門前の所で左にカーブして旧道と合流し、すぐ左手に分かれて曾慶川を横断して八幡前に向っている。この間、摺沢宿の西側に観音堂があり、そこから約三〇〇m東南に曹洞宗毎月山高建寺がある。同寺の「書出」は、「開山之事、当寺ハ当郡上奥玉村清台山安養寺第二世実山見察和尚天正元年開山ニ付、当安永四年迄二百三年經成中供事、一小名之事、天神森、一木山井末寺之事、本山ハ当郡上奥玉村清台山安養寺ニ御座候、但未寺無御座候、一古キ什物之事、一本尊、釈迦如来一体（以下、略）一と述べている。この寺は明治八年（一八七五）と大正五年（一九一六）に火災に遭い、現在の本堂は昭和二年の建立であるが、その山門にある「梅月山」の横額は、仙台の輪上寺先住幹斎の書と伝えている（『安永風土記』）。境内には天明四年（一七八四）の石地藏（高さ一四一cm、幅六三cm、厚さ二四cm、花崗岩）、年号不明の地藏五体、それに安永六年（一七七七）の供養「仏塔」（高さ一七〇cm、幅一四〇cm、厚さ三〇cm、花崗岩）など六基の石碑がある。

摺沢宿の東側の但馬崎には、「一古第一ツ、一八丁館、堅廿間、横舟五間、一二ノ丸、堅舟六間、横舟二間、右ハ葛西御家臣岩沼大炊之助と中御方、天正年中御仕居之由申伝候事」と、「安永風土記」に記されている八丁館跡（現在大部分相地）があり、その下の馬場跡といわれる畑地の中に年代不明の五輪塔（総高七八cm、花崗岩）が一基建っている。さらに、八丁館の大手門の入口と伝えられている所に安永四年（一七七五）の庚申塔（高さ一三二cm、幅三四cm、厚さ三〇cm、安山岩）、文政三年（一八二〇）の湯敷・月山・羽黒三山碑、嘉永六年（一八五三）の金華山碑など九基が並んでいる。

村鎮守であった八幡神社は、「安永風土記」に次のように記されている。

一 村鎮守 八幡社

一 小名 矢引山

一 勧請 唐平年中高祖義公東夷討討之聖母額被創立、御勧請之由申伝候事

一 社地 原給五間、横十一間、一社、南開、四作、一石階、長四十七段、幅六尺

一 額、鳥井堅直、八幡太神宮五字、但業者相知不申候事

一 地上、当村本山兼薬院

一 祭日 八月十五日

一 御祭札之節ハ為替因、一因縁を御足輕四人并小頭三人被相出候事

この八幡神社の境内には、東里田辺希文撰・桃溪荒井盛從書の安永七年（一七七八）の八幡祠碑（高さ一七四cm、幅八二cm）のほか、同九年の塩釜碑（高さ一四四cm、幅一三〇cm）、文化「年」の塩釜碑（高さ一七一cm、幅三四cm）、天保五年（一八三四）の奉寄進石壇碑（高さ七四cm、幅四五cm）、同一四年の庚申碑（高さ一三八cm、幅八六cm）、年号不明の庚申塔（高さ一〇五cm、幅六一cm）、金華山碑（高さ一四六cm、幅八・cm）などがある。いずれも保存状態は良好である。

#### (7) 八幡前・大原宿

八幡前からほぼ国道と重なって進む旧道は、大森の辺で旧道と分かれて左手の山林に入り、「安永風土記」に「大森坂、長サ六丁、当郡大原町」之通路とある大森坂を登る。旧道と分れてから約一kmの区間は道もあるが、その先は定かではなく、やがて折返橋の西側二〇〇mほどの地点で砂鉄川を渡って町道と交叉し、そこを直角に東に折れて町道上を東進している。この旧道が町道と交叉する地点に明和四年（一七六七）の吉面金剛碑（高さ一六五cm、幅七八cm、厚さ三五cm、花崗岩）、寛政元年（一七八九）の梵字供養碑（高さ一一二cm、幅九四cm、花崗岩）が並んでおり、その左手の町道に南面し

て文化五年（一八〇八）の塩釜宮・庚申・山神碑（高さ三三〇cm、幅二二一cm）がある。これは大東町内でも最大と思われる碑である。これらの碑から約二・三〇〇m東進した旧道の左側に、次のような三角形をした絵入り道標（高さ七五cm、底部幅五三cm、安山岩）がある。



道標中央部に書かれた絵は判然としないが、「指差している手」であるという。なお、これは道路工事の際に他所から移転したものとされている。旧位置は不明であるが、道標の意味するところから考えれば、砂鉄川を渡った地点—しかも川と旧道とはさまれた所で、道に北面して建てていたものと思われる。この道標から約三〇〇m南の旧道の東側に勝善神社があり、そこには、内野（大東町大原）産の砂鉄をもって铸造した「馬一」の字額が奉納されている。

一方、絵入り道標から約一〇〇m東進した旧道の北側には、文化十二年（一八一五）の金毘羅大権現碑（高さ三三二cm、幅六五cm、花崗岩）を正面にし、その左側に化政期のものと思われる芭蕉翁之碑（高さ一一七cm、幅六八cm）があり、それには「なつ山や所々にわすれ雲、年くぬぬ笠着てわらしはきなから」と刻まれている。願主は大原（大東町）出身の俳人兼英（文化五年六月葬）、書は藤沢（藤沢町）出身の俳人高橋東卓のものである。これらの碑の前面に天保四年（一八三三）の庚申碑（一つは高さ七七cm、幅二六cm、もう一つは高さ一四六cm、幅一一〇cm）などがある。

これらの古碑群を過ぎると、旧道は町道と分かれてその北側の角明沢・西

山・山吹・大明神（続七）と東進し、大原の町の北西の辺から市街地に入っている。その間の角明沢に明和八年（一七七一）の庚申碑（高さ一一七cm、幅一二三cm、厚さ八cm、花崗岩）、西山に元龜二年（一五七二）里人の勧請と伝える（『大原町誌』）金鳥神社がある。同社の拝殿は昭和四年の建立であるが、本殿は統石大明神のものがそのまま移されているという。境内には樹令約八五〇年という老杉が林立しているほか、寛政九年（一七九七）の庚申碑（高さ一六〇cm、幅一〇四cm、厚さ二三cm、安山岩）、金華山碑など多数の古碑がある。さらに旧道と興田への道との分岐点に、文政五年（一八二二）の庚申碑（高さ一三〇cm、幅六三cm、厚さ二二cm、花崗岩）が南面して建てられている。そして大明神（続石）地内で、町道とその北側を連む旧道にはさまれた所に、昭和に入ってから大原神社が建てられた。ここには上下に重なった巨石（上の石の高さ約二m、長さ約五m、下の石の高さ約二・六m、長さ約一〇m）のほかには大石群があり、もと統石大明神が鎮座していたところである。元禄十一年（一六九八）の絵図（以下、「元禄絵図」という）に「明神」と記載されている。これについて「大原町誌」は、「往昔は此所流丸川にして川中不動と号す、天明天皇五年安倍比羅夫將軍再建といふ、嘉祥年中僧門仁山州大原大明神木地薬師仏を勧請す、往昔は此所を萩の里といふ、是より大原村とす、統石大明神と号す」と述べている。巨石の前に年号不明の庚申碑（高さ一三九cm、幅五六cm、厚さ三五cm、花崗岩）など二基がある。

大原神社の巨石群から約五〇〇m東北の川内に、大東町有形文化財第一号に指定された山吹館（大原城）跡がある。「元禄絵図」に「古館」とあるのがそれである。現在は大部分畑地となっているが、原形は比較的よく保存されている。本丸跡には樹令四五〇年以上と推定される大銀杏（高さ一五m、周囲九・一m）があり、その根元に小祠が祀られている。「大東町の城館」によれば、この城は葛西七騎の一人、東山一七〇〇騎の旗頭と称する大原千

葉氏の居城であったが、天正一九年（一五九一）葛西一揆鎮圧後に没収され、石田三成が修理普請して伊達政宗に引渡した。以後仙台藩の栗野大膳・大桑長三郎らの地頭（給人）が居住した城といわれている。この大原城跡から約三〇〇m右手に春日神社があり、同社前のグラウンド・公民館などのある広場は、伊達氏の屋敷があったところであり、ここで伊達古村（五代仙台藩主）が誕生したという。

さて、大原の市街地の北側を流れる砂鉄川を渡った旧道は、国道と交叉して直角に東北に折れ、大原宿を進んでいる。安永四年（一七七五）の大原村の一代教育之御百姓「丹出」によれば、「九代相統、市町屋敷檢断軍蔵一の先祖で三代目の治部之助は、慶長年中大原町始り之節々檢断御用相勤儀由中伝候得共、在役年数相知不申候事」と記されているので、大原宿の町立は慶長年間のことと思われる。この大原宿は旧道における重要な宿駅の一つであり、その戸数は寛永頃二四戸、幕末に一五〇戸と『岩手県史』にみえている。『大原町誌』によれば、

一市町 一丁二十五間 此人頭二十六人

六日町 一丁十四間 # 三十三人

立町 二十一間 # 五十一人

木家作御免殿下候段々保四年被仰付町場ニ御座候事

とあり、一市町・六日町・立町の三町からなる大原宿は二二〇戸（木百姓）からなり、享保四年（一七一九）に「木家作」が許可されていたことがわかる。「木家作」というのは判然としないが、あるいは楡皮葺のことかとも考えられる。「元禄絵図」をみると、この大原宿の入口に一里塚が記載されているが、もはやその痕跡すら確認できない。国道から南に分岐する曾慶への道に沿って、約二〇〇m行った下七切に葉師堂があり、その境内には元禄八年（一六九五）の古碑（高さ九八cm、幅一〇九cm、厚さ二二cm、安山岩）のほか、秋葉山祠碑、石地藏などが並んでいる。

### (8) 大原宿（櫻井合沢）

大原宿のはずれから約二五〇m北方の清水田に、享保八年（一七二三）の南無阿弥陀仏碑（高さ一・五cm、幅五二cm、厚さ一四cm、安山岩）など二基があり、そこからさらに約五〇〇m離れた東北に曹洞宗亀堂山長泉寺がある。本堂は元文元年（一七三六）の建立と伝えられており、その境内には文化三年（一八〇六）の奥山清興碑（高さ一〇五cm、幅七二cm、厚さ二〇cm、安山岩）など数基の石碑や石地藏が建っている。安永四年（一七七五）の長泉寺の「共出」を次にかかげておこう。

開山之事 当寺ハ葛西・葛野村山吹館主下妻飛彌守信広開基ニ由、機符應堂和尚文政三年八月開山ニ付、当安永四年迄二百九年ニ隆成候事

小名之新 茲寺

一木山井末寺之新 当寺先年当郡家沢心龍泉寺ト本末争論有之、因ニテ寺基落難之上、本寺宗願仕候迄、越後国岩船郡村沢村靈山精光寺頂り末寺ニ移佛遷候

伝法ハ同寺第四世海潮中理和尚ニ仕候儀ニ罷成候、当寺末寺左ニ御書上仕候事（一八ヶ寺塔）

一古平作物之事

一 本尊 釈迦如来像体（以下略）

一 法鼓 巻ノ、指渡ニ尺貳寸

一 当寺方治三年、元文三年向度火災ニ由作物焼失仕候得共、第十一世開基寛山和尚歌京都江為相替、御会ニ入式紙被下置候間、写左ニ御書上仕候事

一 疾病 沙門立白

一 頑女ノおく露露にいろそへてませに影る庭の白菊

一 別冊珍重

一 石御書、武者小路二位卿、江門弟奥州仙台長泉寺

一 享保十八年九月十六日、公安堂御書御會

一 石歌、重信松玉製、秋之節人、風早火候

ところで旧道は、大原宿を出た地点で国道から分かれて右手に折れ、砂鉄川支流に沿って走る町道とはほぼ重なって進む。国道との分岐点から約三・五〇

m 進んだ東側に八幡神社がある。万治二年（一六五九）江刺郡口内から大原に移された伊達宗房が、寛文十一年（一六七二）に現在地に奉遷したものと伝えられている。本殿は延宝四年（一六七六）の建立であり、境内には天和三年（一六八三）の古碑（高さ九五cm、幅七三cm、厚さ三三cm、安山岩）、正徳五年（一七一五）の千手観音石像（高さ七八cm、幅四七cm、厚さ一七cm）など、二〇数基の石碑・石像が林立している。そしてこの神社の後方に、葛西の家臣亀井川氏の居館であった島崎館跡がある。

方、旧道の進んでいる久保坂には、文化十一年（一八一四）の奉納大乗妙典六十六部日本列国碑（高さ一四五cm、幅五〇cm、厚さ三六cm、花崗岩）と延享二年（一七四五）の庚申供養塔（高さ一〇八cm、幅五七cm、厚さ三一cm、安山岩）がある。国道との分岐点からこれらの碑付近までの約六〇〇mの区間は、旧道がほぼ現在の町道と重なっているが、その先は道も消え、国道の南約二ノ百〇〇mの所を流れている川に沿いながら、一ノ通・板木を経て山口へと述べている。その間、嘉永七年（一八五四）の庚申塔（高さ一三〇cm、幅五四cm、厚さ三一cm、安山岩）、「元禄絵図一記載の山口の一里塚跡、天明二年（一七八二）の行山施供養塔（高さ八七cm、幅五五cm、安山岩）、年号不明の南無観世音菩薩碑（高さ八三cm、幅二七cm、安山岩）などがあり、旧道筋であったことを物語っている。行山施供養塔付近から観世音菩薩碑付近までは町道と重なっており、そこを過ぎると道も消え、登り坂となつて沢に入つて行く。その旧道筋の北側に、明治以前のものと思われる石地蔵（頭部欠損、高さ三六cm、幅二七cm）が木造の仮屋の中に鎮座している。その前方に「栗清水」という湧口があり、旅人がのどをうるおしたところといわれている。この地蔵のところからさらに約五〇〇m沢を登ると国道と合流する。そこは笹ノ田段道の手前約二五〇m付近である。旧道はすぐ国道と分かれて、二笹ノタリ坂（三ノ丁折間）（元禄絵図）を登つて笹ノ田峠に向う。峠付近は旧道の面影がわずかに残っている。峠をくだつた旧道は

南側の密林中に破損した石像が二体ある。以前、この付近に茶店があつて旅人が休憩したところと伝えており、夏草の繁茂している中にわずかに遺筋が認められる。ここからさらに約一km進むと標示合沢に至り、そこを流れる谷川に架けられた木橋（標示合橋）が、大原（大東町）と矢作（陸前高田市）との境界である。

#### (9) 標示合沢ノ木

標示合橋を越えて矢作に入ると、旧道は一面草におおわれているもの、人の通行には支障なく、昔日の面影をよくとどめている。そこを約三〇〇m進んだ旧道の北側に、寛延元年（一七五二）の梵字供養塔（高さ一五〇cm、幅六〇cm、厚さ一四cm、水成岩）が他の庚申碑とともに畑に接して建っている。この古碑群から約二〇〇m離れた地点に、元禄十二年（一六九九）の矢作村絵図写（以下、「元禄村絵図」という）に記載されている小黒山の一里塚があり、幅約三mの旧道をはさんで南北に二基現存している。南の塚は高さ一・三m、周囲二〇m、東西径五m、南北径六mあり、北の塚は高さ二m、周囲二二m、東西径七m、南北径六mの規模である。貴重な街道関係の文化財として保存を講じたものである。近くの阿部義彦家は後に松並木があつたので、「松の下」の屋号で呼ばれている。同氏の話によれば、昭和の初め頃まで、大原方面から鈴をつけた馬が數十頭も列をなして今泉方面に飯類を運送し、その帰りに魚介類をつけて通つたということである。また古老の話によれば、この付近には「茶屋っこ、カンベイ茶屋」などかつて、濁酒や馬の飼料を売っていたという。

この一里塚から約一・七km進んだ地点の旧道は、小黒山から立木橋に至る市道南側の、しかも山の中段の急斜面を通つているため、道幅は約三mほどである。現在この付近の旧道は、国道三四三号線の改修工事にもなつて、

やがて新しい国道へと姿を変えようとしている。ここでも昔の道筋が一つ消えていく運命にある。立木橋から坂下の「里塚（「元禄村誌図」所載）」に至る旧道は、中平川（矢作川）に沿って国道の東側を進んでいるが、とくに「里塚付近はうすうすたる杉林の中を行くので、笹や雑草など生えてはいるものの、道筋は明瞭である。坂下の「里塚は幅約2mの旧道をはきんで東西に2基あり、ともに石積みの部分が、mほどある。東の塚は高さ2・5m、周囲2・0・5mの大きさで、その頂上に径約60cmの松の切株がある。西の塚は高さ2m、周囲2・0・5mで、その頂上にこれまた径約100cmの松の切株がある。ここから中平川沿いに国道と一部重なりながら進み、坂下橋の所で国道を横断して川の右側に出る。それからふたたび国道を横切り、その右側を走っている市道と重なって中平まで進み、その先はほぼ国道と重なって愛宕下に述べている。

愛宕下で国道から左手に生出への道が分岐しているが、その分岐点に真言宗智山派龍王山円城寺があり、開薫院宥健法印による慶長年間の開山と伝えられている。一元禄村誌図にも記載されているが、安永四年（一七七五）の矢作村の「風土記御用書出」（以下、「安永風土記」とい）は「薬王山円城寺」として、「一小名二又、一真言宗、一仏殿、南向七間半、横六間半、一本尊、大日如来、木仏坐像、御長三尺、但作者相知不中候事」と記している。円城寺地内には享保三年（一七二八）の梵字供養塔（高さ一・五m、幅五〇cm、厚さ一五cm）をはじめたくさんの石碑がある。この円城寺入口の国道に面して白糸瀑歌碑（高さ一〇〇cm、幅六〇cm）が建っている。瀑歌は安政五年（一八五八）三月長州の詩人小倉聖堂が詠んだもので、碑の建立は明治二年（一八九二）である。「元禄村誌図」に記載されている白糸の流は国道から約1km北にあり、開薫院堂脇を流れる沢水が岩壁をぬって生出川に落下しており、その景色があたかも白糸を乱して懸けたように見えるところから、かく名付けられたものである。この流の裏手に開薫院堂があ

り、その北側に明和六年（一七六九）の開薫院宥健法印入定碑（高さ一四〇cm、幅五五cm、厚さ一四cm、水成岩）が建っている。

一方、国道の南の袖野に八坂神社がある。「安永風土記」に「一牛頭天王社、一小名、外野、一社地、南北拾五間、東西拾五間、一社、南向式間作」とあるように、もと「牛頭大上社」と呼ばれていた。社名の改称は明治六年（一八七三）のことである。ここには元文五年（一七四〇）奉納の絵額、「弘化二年、奉立牛頭大上宮一字為村中」と記された改築棟札などがある。

愛宕下から仙婆巖付近までの旧道はほぼ国道と同じで、違いは信内地内を国道より北側に迂回している部分だけである。「元禄村誌図」をみると、その間の二又に「里塚が記載されているが、現在はその痕跡すらとめていない。ただ「里塚跡の位置を確認できるのみである。仙婆巖は陽神・陰神の二岩からなり、陽神岩は数10mの岩石が国道をおおうように出ており、陰神岩は矢作川を隔てた対岸に屏風状にまきり立っている。陽神岩の背後の山頂に、愛宕山と呼ばれる宝曆一〇年（一七六〇）の供養塔（高さ六三cm、幅五〇cm、水成岩）が東方を向いて建っている。その前方二mほどのところに、宝暦年間のものと思われる道標（高さ四四cm、幅二五cm、厚さ三cm、水成岩）があり、それには「下馬」と刻まれている。ここからさらに約一〇〇m東方の峰に、「丁」と刻まれた道標（高さ四二cm、幅三〇cm、厚さ一二cm、水成岩）がある。その南の樹木には、享保三年（一七二八）の大乗妙興・字・石供養塔（高さ一四五cm、幅七五cm、厚さ三二cm、水成岩）、同一四年の梵字供養塔（高さ一〇七cm、幅六〇cm、厚さ二〇cm、水成岩）などの六基が、国道から約六m離れた北側の斜面に一例に並んでいる。

これらの古碑群を過ぎたところから、旧道は国道と分かれてその北側を東進しているが、その分岐点付近の国道端に、年号不明の道標（高さ五五cm、幅二五cm、厚さ一〇cm、礫岩）、享保九年（一七二四）の南無阿弥陀仏碑、

宝曆三年（一七六三）、明和二年（一七六五）の供養碑などが並んでおり、道標には「愛宕山、五丁」と刻まれている。宝曆三年の供養塔（高さ七五cm、幅五五cm、厚さ二五cm、花崗岩）の下部には、見ざる・聞ざる・云わざるの三猿が刻まれており、土地の人はこの塔を「三猿」と称している。

この梅木地内には多くの道標が残っている。まず、梅木道雑家の前を走る国道と矢作川とはさまれた部分に出陣があり、その開田時（明治三〇年前後）につくられた石垣の最下部に、矢作川に南面して斜に置かれている道標（高さ六〇cm、幅五五cm）がある。国道から約一〇m南のところである。それには一東ハ（欠損）、南ハ鹿折気仙沼道、西ハ生出大原道、茂惣次」と刻まれており、建立者の名からして宝暦年代のものと思われる。なお、欠損部分は「今泉高田道」とあったものであろう。その近くの矢作川に架けられた板の板橋を渡り、対岸の山道に沿った東側に宝暦九年（一七五九）の道標（高さ八五cm、幅七〇cm、周囲一九〇cm、花崗岩）がある。国道から約三〇cmほど南の地点であり、土地の人は「お水神様」といっている。花崗岩の自然石を用いた道標はその上部に一東西南北」と刻み、「東」の字の下八cmのところには径三cmの丸が九つあり、「西」の字の下二五・五cmのところに「大水神」と蛇の絵がある。さらに、「大水神」とあるところから九cmほど右側



に、「一番陸奥国松嶋、二番近江国竹生嶋、三番丹後国南利相」と、当時の景勝地が並記されている。文字は風化がはげしく判読に苦勞するが、おおよそ上記のごときものである。

右の道標はもともと現地点にあったようではないが、どこから移されたのかも不明である。この道標より南手の山すその小暗い木立の中に元文三年（一七三八）、安永二年（一七七三）の水神者（高さ八〇cm、幅六〇cm、厚さ一六cm、花崗岩）など、〇數基の石碑がある。その左端が元文三年のものであり、蛇の頭のような形をした自然石に二匹の蛇が刻まれている。ここから気仙沼へ通ずる道を約一km南下し、飯森沢への道が分岐している地点に、庚申・山神などの供養碑八基とともに、宝暦年代のものと思われる道標（高さ一〇〇cm、幅五〇cm、厚さ二五cm）がある。これは旧道と直接関係ないが、貴重な文化財として注目したい。文字はかなり明瞭で、次のように刻まれている。

- (正曲)
- 一
  - 右ハやまみち
  - 左ハ鹿折せんのまみち
  - 善光寺へ百三十一次道法百六十八里
  - 高野山へ百六十三次道法百六十八里
  - 熊野山へ百六十三次道法百七十六里
- (左側面)
- 茂惣次
  - 「飯森沢十八丁」

④ 梅木と下淵橋

梅木の高橋正七家の西側で国道と分かれて左手に入る旧道は、同家の後を通って国道の北側を東進し、その先は松の合沢への道が分岐する地点でふたたび国道と合流している。その間、旧道筋の北側に日月神社がある。「元禄村絵図」に「日月」と記載されているものである。「安永風土記」は「日月

社」として、「小名 梅木、一社地 南北拾五間、東西拾五間、一社 南 向者間作」と記している。ここには享保一〇年（一七二五）の棟札が保存さ れている。松の合渡道の分岐点で国道と合流した旧道は、その先、国道の北 側を迂回しながら湯沼に至る。その手前の耳切で旧道がカーブしてこの北 側の岸上に、嘉永四年（一八五二）の道路改修記念碑（高さ一・二〇m、幅四 二cm、厚さ二・五cm、砂岩）があり、銘文を上にして倒れている。湯沼には 「元禄村絵図」に記載されている一里塚一基がある。南側の塚は馬頭開闢時 に破壊されて今はないが、北側の塚が国道の左側にその痕跡をどめてお り、杉の巨木が二本（日通し径一・五〇cmと一・〇cm）現存している。

湯沼の二里塚を過ぎて、国道の南側を迂回している旧道は東角地で国道 と合流し、すぐ分かれて左手の市道を進むが、国道から約一〇〇mの地点に 寛保二年（一七四二）の道祖神（高さ一・〇六m、幅七〇cm、厚さ七cm、下部 に三狼が刻まれている）のほか、享保一四年（一七三九）、同一七年、天 明六年（一七八六）、寛政元年（一七八九）、安政二年（一八五五）の庚申 塔など、たくさん石碑がある。ここを土地の人は破の神と称しているが、 旧道はその前の峠を越えてふたたび国道と合流し、その先はほぼ国道と重な って進んでいる。その間、大船渡線の陸前矢作駅から約三〇〇m北側に観音 寺跡があり、現在は畑地となっているが、その北端に享保一二年（一七二七） の大乗妙典一字、石塔（高さ一・五〇cm、幅六〇cm、厚さ一・〇cm）が東向に建 っている。ここから約三・四〇〇m右手の片地家には、駒形神社と館壁敷古 井戸がある。駒形神社について「安永風土記」は「馬頭観音堂」と記し、 「一境内 南北五間半、東西四間、一草 南向武間四面、一本尊 金仏坐 像、御長七寸、春日御作之山中伝候、右へ宮部頼礼三十三所之礼所之内六帝 御座候事」と述べている。気仙三十三観音の六番札所であった。ここには文 化一〇年（一八一三）の馬頭観世音額のほか、文化八年、文政一三年（一八 三〇）、天保一二年（一八四〇）、同一四年、嘉永四年（一八五二）、文久

三年（一八六三）などの絵馬約五〇点が奉納されている。

矢作村の肝入を代々勤めた村上家（中箱家屋敷）は東訪にあり、そこには 立派な四脚門が残されている。ここから約二〇〇m進入、国道と矢作川の堤 防道の分岐点に弘化二年（一八四九）の魁國廣宿塔（高さ一六七cm、幅一・ 〇cm、厚さ三・〇cm）が建っている。この塔より北方の神明前には、国道から 約二〇〇m北側に天照御祖神社があり、さらに三〇〇m北方に鶴崎城（外 館）跡がある。そしてここから右手の市道には、「安永風土記」に「真言 宗、一仏殿 東南向、堅九間、横七間、一本尊 大日如來、木仏坐像、御長 三尺、但作者相知不申候事」と記されている長谷山観音寺がある。同寺に は本尊の大日如來像など多くの仏像のほか、陸前高田市文化財指定の慶長 七年（一六〇二）の彩色騎馬（縦四〇・三cm、横五八・七cm）がある。また ここには、「元禄村絵図」に「観音」と記載されている観音堂があり、「安 永風土記」は次のように説明している。

#### ・観音堂

- ・小名 堂ヶ洞
- ・通名 坂上田村莊昌利仁村軍大馬式部御孫三郎康頼、大猷凡軍形治之禮、当 郡三郎之内小友村ニ早基、孫川之令丈、矢作村ニ康徳と申候東洋御孫治政 成、彼ノ婦を喰飲地直観音堂相立候山中伝候、其後御堂普請之節願申上、 当郡上住村抽出御林を御伐木候下置、正徳二年三月建立仕候事
- ・境内 南北拾五間、東西拾五間、一草 南向武間四面
- ・本尊 十一面観音、木仏立像、御長廿六尺、春日御作
- ・脇尊 虚空蔵、比沙門阿耨、木仏立像、御長六尺
- ・慈悲大佛御作之山中伝候
- ・石三輪三三 志茂源順申上、御下知を以御開闢仕未候事
- ・色居 東南向
- ・地位 東寄、観音寺
- ・祭日 七月十七日

この観音堂の本尊はもと、丈二尺あったが、現在は七尺六寸（三・一六m）、 気仙三十三観音として有名で三三三年にごとく開帳される。両脇尊はともに高さ二・八

○cmである。堂の右側には元禄七年(一六九四)の梵字供養碑(高さ八七cm、幅六〇cm、厚さ二二cm)など、四基の古碑がある。その中には、碑の中央に「**○**」と刻んだ延享元年(一七四四)の碑もある。

さて、矢作町を国道と重なって進んできた旧道は、外道尻へ向う市道の分岐点を越えると、やがて旧道と分かれて右手の市道を進み、矢作川に架けられた下瀬橋の両手に向う。

### (1) 下瀬橋と今泉宿

江戸時代の下瀬橋は一長式拾七間、幅七間半……当郡今泉村五之通路(「安永風土記」)といわれ、現在の位置よりやや西側にあつたものと思われる。そして旧道は、現在の下瀬橋から約二〇m離れたところにある天明二年(一七八二)の下瀬橋碑(高さ一一〇cm、幅六三cm、厚さ一八cm、水成岩、村上俊斎撰文)の前を通り、山谷部落へ通ずる山道を送って行く。ここが「乗越坂、長サ拾五丁」(「安永風土記」)といわれているところであり、その峠が今泉村(陸前高田市)との境となつていた。下瀬橋から約八〇〇mほどの区間は、旧道の面影が良く残されており、山谷部落付近には大正頃まで松並木があつたことである。峠を越えてくたつて行く取も「乗越坂」と呼ばれ、今泉村からみれば「登四丁」であつた(安永四年の今泉村の「風土記御用書出」、以下「安永風土記」という)。

この坂に荒川の一里塚があり、旧道の東側に一基だけその名残りをとどめている。この一里塚に至る約五〇〇mの間はやつと人が通れる程度である。

一里塚から約五〇〇m東側の国道沿に泉地寺(正観音堂)があり、その本堂は宝永三年(一七〇六)の建立である。「安永風土記」によれば、この本尊は正観音(木仏立像、長二寸五分)で弘法大師の作、一産形観世音の横額は松島瑞慶寺先住天嶺和尚の書であるという。観音堂は南向で三間四向で

あり、奥州願礼三三番札所のうちの第一四番、気仙郡三三番札所の第一番である。さらにここには子安観音堂があり、その本尊は婦人が児を産む姿をした天然の石である。「安永風土記」は次のように説明している。

#### 子安観音堂

一 小名 栗形

一 勧請 御郡山根上ノ設様正徳年中御堂瑞建立成置飯山中伝候(以下略)

一 境内 南北五間、東西三間、一室 南向堂門四間

一 本尊 往昔男石女石と申向石有之候由、女石ハ高さ五尺弱、幅四尺弱ニ而、此

石の間ニ丸々石を挟み、其形婦人の子を産候こころニ御座候間、産形石と唱

奉、安永之御願御願申候得ハ、雲輪御座候、仍安永御守礼御願出泉地寺に相出

候、石石を置本尊と仕置申候、男石ハ何方ニ在之候哉相承り候者無御座候事

一 地主・別当 泉地寺

一 祭日 七月十八日

一方、旧道は荒川一里塚のところから市道と重なって進み、やがて旧道と合流して約四〇〇m南進すると、国道の東側に今泉大橋跡、西側に北野神社がある。現在の姉術橋の上流約四〇〇mの地点に、以前あつた木製の姉術橋の橋脚が残っているが、そこが昔の今泉大橋のあつたところである。「安永風土記」には「今泉大橋、長四拾八間、幅三間、今泉小橋、長拾間、幅壹間半、右式ヶ所共三当所高田町五之通路」と記されている。北野神社は「安永風土記」に「天神社」とあり、一 小名 上ノ山、一 勧請 慶長年中太田道灌天神社三拾三ヶ所ニ御建立之節、右社御勧請之由中伝候事、一 社地 南北拾七間、東西七間、一 社 南向老問作、一 鳥居東向」と記されている。神社境内の急な崖状の高所に、延宝六年(一六七八)の梵字供養塔(高さ二七五cm、幅五〇cm、砂岩)など六基の石塔が倒れたままで放置されている。すまやかに保存策を検討すべきである。

この北野神社を過ぎると、旧道は今泉宿に入る。本稿で取上げてきた今泉街道はここが終着地である。「安永風土記」によれば、村名の由来を「当村産形と申所々往古泉湧出中候ニ付、村名を今泉と唱来申候」と述べ、さらに

「一当村今泉と中宿場有之、荒町四拾九間、御免町三拾間、九口町貳拾五間、八日町壹丁五拾五間、上町丁切下町丁切道三丁三拾九間（御座敷）」と記して、いずれも寛永一九年（一六四二）の検地以前からの町場であるという。ここからは気仙沼町・高田町・世田米町・大原町への道が分岐しており、とくに大原宿への里程は、「大道」で、「六里拾四丁四拾九間」である。

今泉宿の西側には、今泉古館・館ヶ脇館・金剛寺などが国道から約二〇〇m離れて北から並んでいる。仁和四年（八八八）の創建と伝える金剛寺は、正式には「如意山・栗院金剛密寺」と称し、真言宗智山派に属している。「気仙風土草」は「この寺むかし浜田村にあり、葛西領の頃、千葉安房守の祈禱所なり、其の寺跡いまにおいて此の寺の特領なり、浜田より高田に移し、その後今の地に移す」と説明している。「安水風土記」によれば、この本尊は大日如来（木仏坐像、長二尺五寸）と如意輪観音（木仏坐像、長一尺）の二体、仏殿の横額のうち「栗院」は長倉・平の寺、「金剛密寺」と「如意山」は仙台輪王寺禪居登吾和尚の再であるという。気仙郡順礼三番札所の第二番である。

さて、旧道と重なっている国道が、鎌倉橋にし字形にまがる角に代官所跡があり、南北約五〇m、東西約三〇mの広場は今泉保育園の遊び場となっている。昭和三〇年に陸前高田市は市制を施行したが、それ以前の気仙町役場はこの地に置かれていたのである。

### 三 街道筋に残る主な文化財

(1) 道標と一里塚

○櫛ノ木の道標（一関市舞川字櫛ノ木）

寛政二二年八月建立、「慈来塔」とあり、山ノ目と松川までの里程が記

されている。

○桃の木洞入口の道標（東山町長坂字南勢井里）

文化八年建立、地蔵尊の刻まれた下部に猿沢道、興田道、正法寺道、摺沢道、長坂道の方向が記されている。

○折坂の検入り道標（大東町大原字折坂）

三角形をした自然石に「南するさわ、（右）さる沢道、十二里」と記されている。

○櫛木の道標（陸前高田市矢作字櫛木）

(1) 宝曆年代の建立と思われる。「一東へ（欠損）、南へ鹿折気仙沼道、西へ牛出大原道、茂惣次」と記されている。

(2) 宝曆九年建立、京・伊勢・高野山・熊野山・善光寺・日光山・地蔵・羽黒山への里程を記す。本文中に詳記した。

(3) 年代不明、「愛宕山へ五丁」と記されている。

○飯森の道標（陸前高田市矢作字飯森）

宝暦年代の建立と思われる。「右へやまみち、左へ鹿折せんのまみち、云々」と記されている。本文中に詳記した。

○山口の一里塚（大東町大原字山口）

二元禄村絵図一に記載されているもので、道の北側に一基、わずかにそれらしい跡が知られる。

○小黒山の一里塚（陸前高田市矢作字小黒山）

「元禄村絵図」に記載されているもので、旧道をはさんで南北に一基現存している。

○坂下の一里塚（陸前高田市矢作字坂下）

「元禄村絵図」に記載されているもので、旧道をはさんで東西に一基現存している。

○湯濱畑の一里塚（陸前高田市矢作字湯濱畑）

「元禄村絵図」に記載されているもので、旧道の北側に一基、その痕跡をとどめている。

○荒川の一里塚（陸前高田市気仙町字荒川）

旧道の北側に一基、その痕跡をとどめている。

(2) 社

○菅原神社（一関市舞川字原沢）

「安永風土記」に「一村鎮守天神社」で、「元禄村絵図」所載、明和七年の権札を保存している。

○火産靈神社（東山町長坂字太田）

葛西の巨千葉嵐村により天正八年勧請と伝えている（社記）。「安永風土記」に「荒神社」で、地元では「荒神様」と敬称している。ここには芦東山奉納の「八面大荒神」の肩類、長坂の俳人鈴木東栄奉納の文化七年の句額がある。

○八幡神社（大東町摺沢字八幡前）

「安永風土記」に「村鎮守八幡社」で、康平年中の勧請と伝えている。

○八幡神社（大東町大原字八幡前）

伊達宗房により寛文一年現在地に奉遷と伝えている。本殿は延宝四年の建立。

○駒形神社（陸前高田市矢作字片地家）

「安永風土記」に「馬頭観音堂」で、気仙三三観音の六番札所である。ここには文化八年をはじめ文政・天保・高永・文久などの絵馬約五〇点が奉納されている。

○北野神社（陸前高田市気仙町字中井）

「安永風土記」に「天神社」で、慶長年中に勧請されたという。元

治元年再建。

(3) 寺院

○千手観音堂（一関市中里字川辺藤後）

文化二年建立、大工棟梁は赤森村鎮守観音堂や中尊寺弁慶堂を建立した小野寺源大夫である。

○観福寺（一関市舞川字配ヶ沢）

天台宗。東光山。もと貞言宗であったものを貞享五年に改宗（「安永風土記」）。同寺には阿弥陀如来坐像（江戸期）、不動明王立像（天保五年）、観音像（秘仏）がある。

○二十五尊堂（一関市舞川字水神）

寛政一年建立、同年奉納の木造彩色の二十五尊像が二五体完全にそろっている。

○安養寺（東山町長坂字東本町）

曹洞宗。城高山。もと真言宗であったものを慶長二年に改宗。同年、江刺郡黒石村正法寺二世観室良盛和尚により開山と伝えている（「安永風土記」）。現在の本堂は文政二年の建立という。

○養龍寺（東山町長坂字里前）

曹洞宗。龍沢山。紫波郡松山村大光寺周勝仲易和尚により文明二年開山と伝えている（「安永風土記」）。現在の本堂は文政二年の建立。本尊の阿弥陀如来立像の頭部は室町期のもの、体部は慶長一三年の補修である（銘文）。

○長泉寺（大東町大原字長泉寺先）

曹洞宗。龜宝（桂）山。葛西・旗山吹船千葉信広開基、機外慶俊和尚により文明三年開山と伝えている（「安永風土記」）。現在の本堂は元文元年の建立という。

○円城寺（陸前高田市矢作子愛(石下)

真言宗。竜王山。開闢院有健法印により慶長年間開山と伝えられている。

「安永風土記」には「秦王山圓城寺」とある。

○観音寺・観音堂（陸前高田市矢作子寺前）

真言宗。長谷山。慶長九年の開基創建と伝えられている。ここには慶長七年の彩色絵馬がある。「安永風土記」によれば、観音堂は正徳元年の建立という。気仙三観音の一つで、本尊は三三三年ごとと開帳される。

○金剛寺（陸前高田市気仙町字荒川）

真言宗。如意山。仁和四年の創建と伝えられる。「安永風土記」によれば、本尊は大日如来と如意輪観音の二体で、気仙郡順礼三三番札所の第一番である。

○泉増寺・正観音堂（陸前高田市気仙町字荒川）

真言宗。懸干山。現在の本堂は安永二年の建立である。「安永風土記」によれば、本尊の正観音像は弘法大師の作、正観音堂は奥州順礼三三番札所のうちの第一四番、気仙郡三三番札所のうちの第一番札所である。さらにはここに子安観音堂があり、その本尊は婦人が児を産む姿をした天然の石である。

(4) 古碑

○横澤古碑群（一関市川辺字久保）

文化八年の雷神塔をはじめ文政・安政・文久・慶応などの古碑六基がある。

○道場峠古碑群（一関市舞川字道場）

安永九年の御時大明神・横山不動尊碑をはじめ文化・文政などの古碑がある。

○道場の古碑群（一関市舞川字道場）

寛政一三年の清水観世音碑をはじめ文政・弘化・嘉永などの古碑五基がある。

○香原神社の古碑群（一関市舞川字原沢）

頼三樹三郎揮毫の弘化三年の金剛山碑をはじめ、天明・文化・文政・安政などの古碑六基がある。

○宿前の芭蕉句碑（一関市舞川字宿前）

文化一四年新妻奇右衛門建立。山路来て何やらゆかしすみれ草」とある。

○高ト坂登リ口の古碑群（東山町松川字瀬ノ沢）

文政一四年の金華山碑など化政期の古碑四基がある。

○熊野神社の古碑群（東山町長坂字町裏）

明和三年の庚申塔をはじめ寛政・文化・文政・天保の古碑などがある。

○沢の入道路上の古碑群（東山町長坂字東本町）

明和三年の庚申供養碑など、一基が林立している（うち明治期のもの三基）。

○愛宕神社祭り場の古碑群（東山町長坂字榮宿）

明和七年の庚申碑をはじめ安永・寛政・文化・文政・安政・万延などの古碑一基（うち明治期のもの一基）がある。

○五輪坂上の古碑群（東山町長坂字館合）

天明七年の天神宮碑をはじめ寛政・文化などの古碑九基がある。

○千葉院の古碑群（東山町長坂字館合）

享保一九年の奉念庚申塔をはじめ天保・嘉永などの古碑五基がある。

○館合道路傍の古碑群（東山町長坂字館合）

文政八年の西四三十三願礼塔など五基がある。

○善龍寺境内の芭蕉句碑（東山町長坂字里前）

文政一一年建立。「ささ小蟹足踏し上るしみづ哉、芭蕉」とある。

○観音堂境内の古碑群（東山町長坂字太田）

延享元年の奉念庚申供養塔をはじめ大明・文政・慶応などの古碑五基がある。

○高金坂道上の古碑群（東山町長坂字荒瀬）

安永八年の馬頭観音碑など四基がある。

○豊南田の渡船碑（大東町摺沢字豊南田）

弘化四年建立。砂鉄川の渡河点付近にある。

○礼田の古碑群（大東町摺沢字礼田）

明和七年の庚申碑など四基がある。

○高建寺の古碑群（大東町摺沢字高建寺）

安永六年の仏塔など六基がある。

○八丁館大手門の古碑群（大東町摺沢字但馬崎）

安永四年の庚申塔をはじめ文政・嘉永などの古碑、○基がある（大正期のものを含む）。

○八幡神社境内の古碑群（大東町摺沢字八幡前）

安永七年の八幡祠碑をはじめ文化・天保などの古碑八基がある（大正期のものを含む）。

○折坂の古碑群（大東町大原字折坂）

化政期のものと思われる芭蕉翁之碑（「なつ山や所々にわすれ雲、年くれぬ笠着てわらじはきながら」）をはじめ文化・天保などの古碑五基がある（うち明治期のもの一基）。

○八幡神社境内の古碑群（大東町大原字八幡池）

天和三年の古碑・正徳五年の hands 観音碑など二〇数基の石碑・石像が林立している。

○小黒山の古碑群（陸前高田市矢作字小黒山）

寛延四年の梵字供養塔など九基がある。

○白糸湯歌碑（陸前高田市矢作字爰宕下）

安政五年長州の詩人小倉魁堂が詠んだ湯歌が刻まれている。明治二五年の建立。

○関東院宥健法印入定碑（陸前高田市矢作字西越）

明和六年村上傑斎撰文、生田の理之丞・喜徳石衛門建立。

○梅木の古碑群（陸前高田市矢作字梅木）

(1) 享保一三年の人乗妙典一字一石供養塔など五基がある。

(2) 元文三年の水神塔など一〇数基がある。

○道路改修記念碑（陸前高田市矢作字耳切）

嘉永四年建立。「月嶺山柱万歳誌」とある。

○東角地の古碑群（陸前高田市矢作字東角地）

享保一四年の庚申碑をはじめ大明・寛政・安政などの古碑がある。

○観音堂境内の古碑群（陸前高田市矢作字寺前）

元禄七年の梵字供養塔をはじめ享保・延享などの古碑一四基がある。

○下淵橋碑（陸前高田市矢作字山谷）

天明二年建立。村上傑斎撰文。

○北野神社境内の古碑群（陸前高田市気仙町中井）

延享六年の梵字供養塔など六基がある。



東山町 古碑 (松川)



東山町 庚申碑



東山町 古碑 (愛宕神社祭り場)



東山町 道標 (長坂)



東山町 五輪坂上の古碑群



大東町 旧道（昔の面影が残っている）



大東町 渡船碑



掘沢宿駅附近（元禄11年の古絵図千蔵図書館蔵）



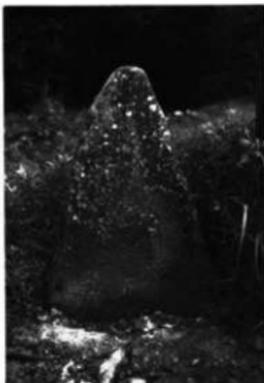
大東町 古碑



大東町 八幡詞碑



大東町 古碑群



大東町 船入り道標



大東町 古碑



大東町 古碑 (芭蕉翁之碑)



大東町 勝善神社



大東町 大原神社の大石



大東町 古碑 (寛政九年)



大東町 長泉寺



大東町 大原宿 (元禄11年の古絵図千原図書館蔵)



大東町 境界 (大原と矢作)



大東町 八幡神社



大東町掘沢村 (文化14年の古絵図掘沢公民館蔵)



大東町掘沢村 (元禄11年の古絵図加藤進一氏蔵)



陸前高田市 一里塚 (小黒山)



陸前高田市 標示合橋 (矢作側より撮影)



陸前高田市 一里塚 (坂下)



陸前高田市 消えようとしている旧道 (左上)  
右下は山道 右上の崖のあたりは国道343号



陸前高田市 道標 (梅木)



陸前高田市 供養碑群



陸前高田市 道標 (梅木)



陸前高田市 道標 (梅木)



陸前高田市 廻国塔



陸前高田市 道標 (飯森)



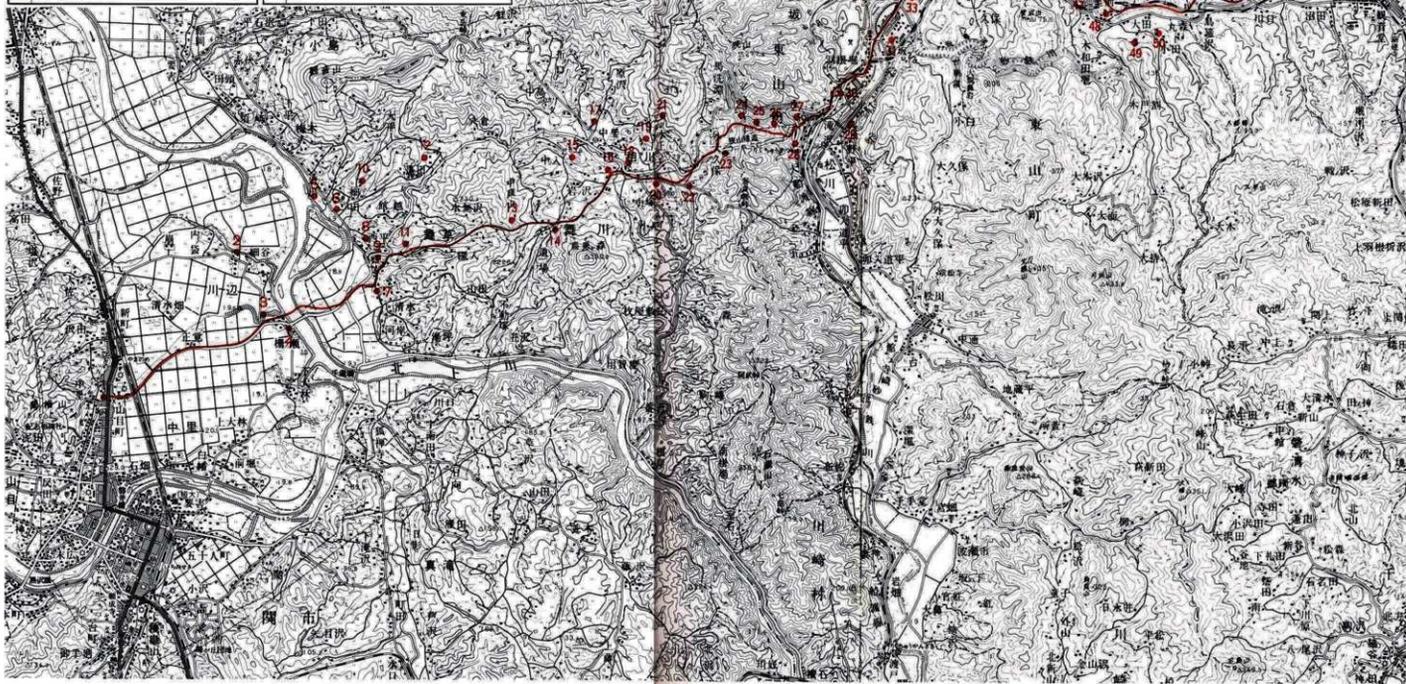
陸前高田市 今泉大橋跡



陸前高田市 供養碑 (観音堂境内)

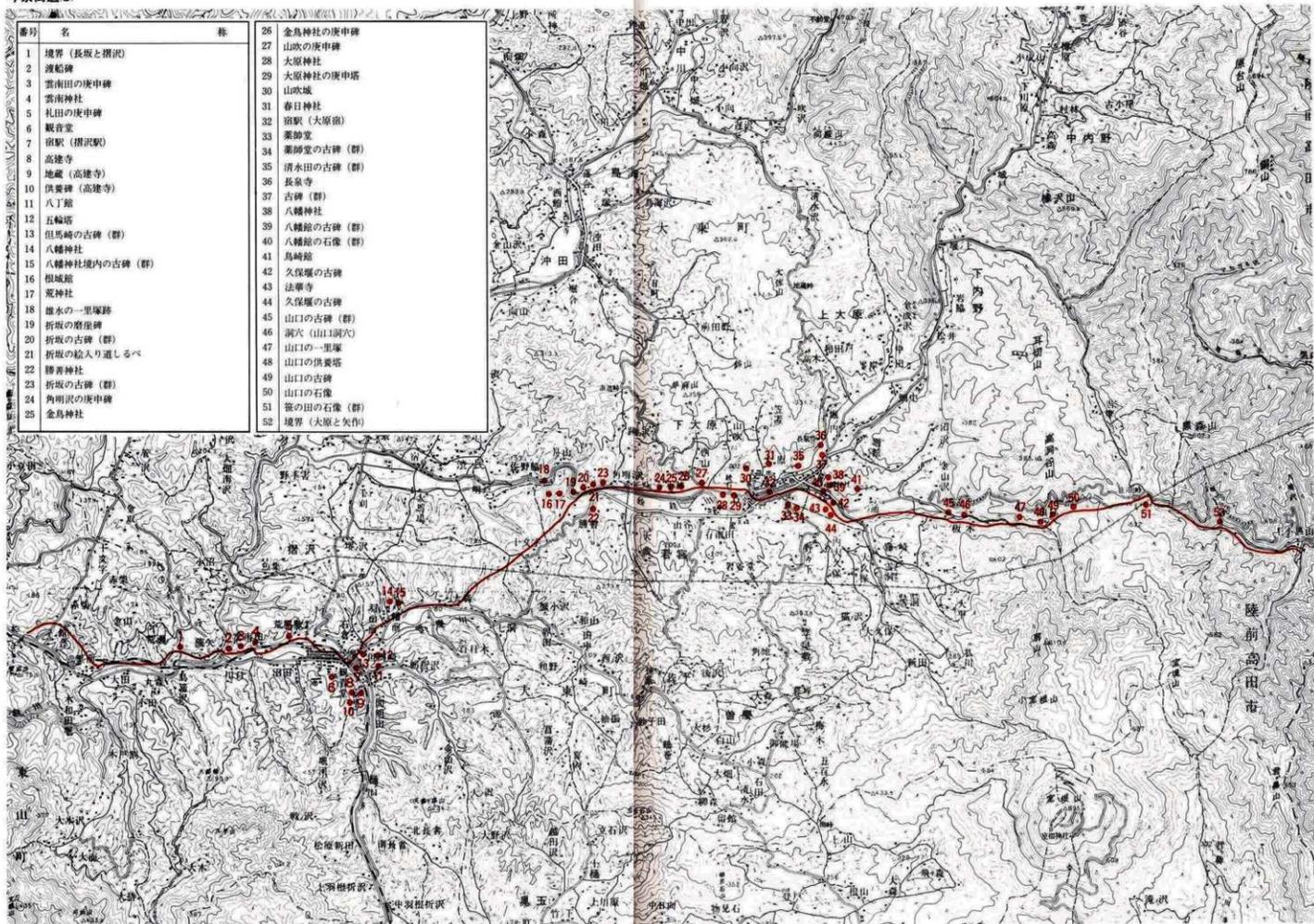
今泉街道(1)

番号	名	標
1	起点附近	
2	千手観世音堂	
3	街道筋(川辺)古碑群	
4	北上川舟渡場	
5	和田地内古碑	
6	細田地内古碑群	
7	旧舟渡場跡古碑群	
8	兼師堂	
9	谷地地内古碑群	
10	観福寺	
11	齊羅神社	
12	天神宮	
13	道場跡古碑群	
14	街道筋古碑群(字道場地内)	
15	古籠跡	
16	街道筋松並木の一部	
17	菅原神社	
18	芭蕉句碑	
19	常川寺・内田氏邸	
20	小塚五輪塔・古碑群	
21	二十五尊像堂	
22	豊来塔・松川・前沢街道交差点	
23	旧道と吉田氏邸門	
24	旧道東山町との境界附近	
25	塚中塚	
26	行人塚	
27	高下坂登り口の古碑	
28	参書大衆妙典一字一石碑、清水観世音菩薩碑	
29	一里塚跡	
30	旧松川村と旧長坂村の道境	
31	熊野神社	
32	舟塚跡	
33	御蔵場跡	
34	驛引地址	
35	塚中塔	
36	沢の入道路上の古碑群	
37	城高山安樂寺	
38	安樂寺入口の碑	
39	マリア観音像	
40	傳梅館址	
41	橋の木洞入口の道標	
42	堂守神社祭り場の古碑	
43	五輪塔上の古碑群	
44	千聖院の古碑	
45	館合道路傍の碑	
46	西館址	
47	東館址	
48	龍山普光寺	
49	大常霊神社	
50	観音堂境内の碑	
51	高金取道上の碑	
52	旧膳沢村との道境にある碑	

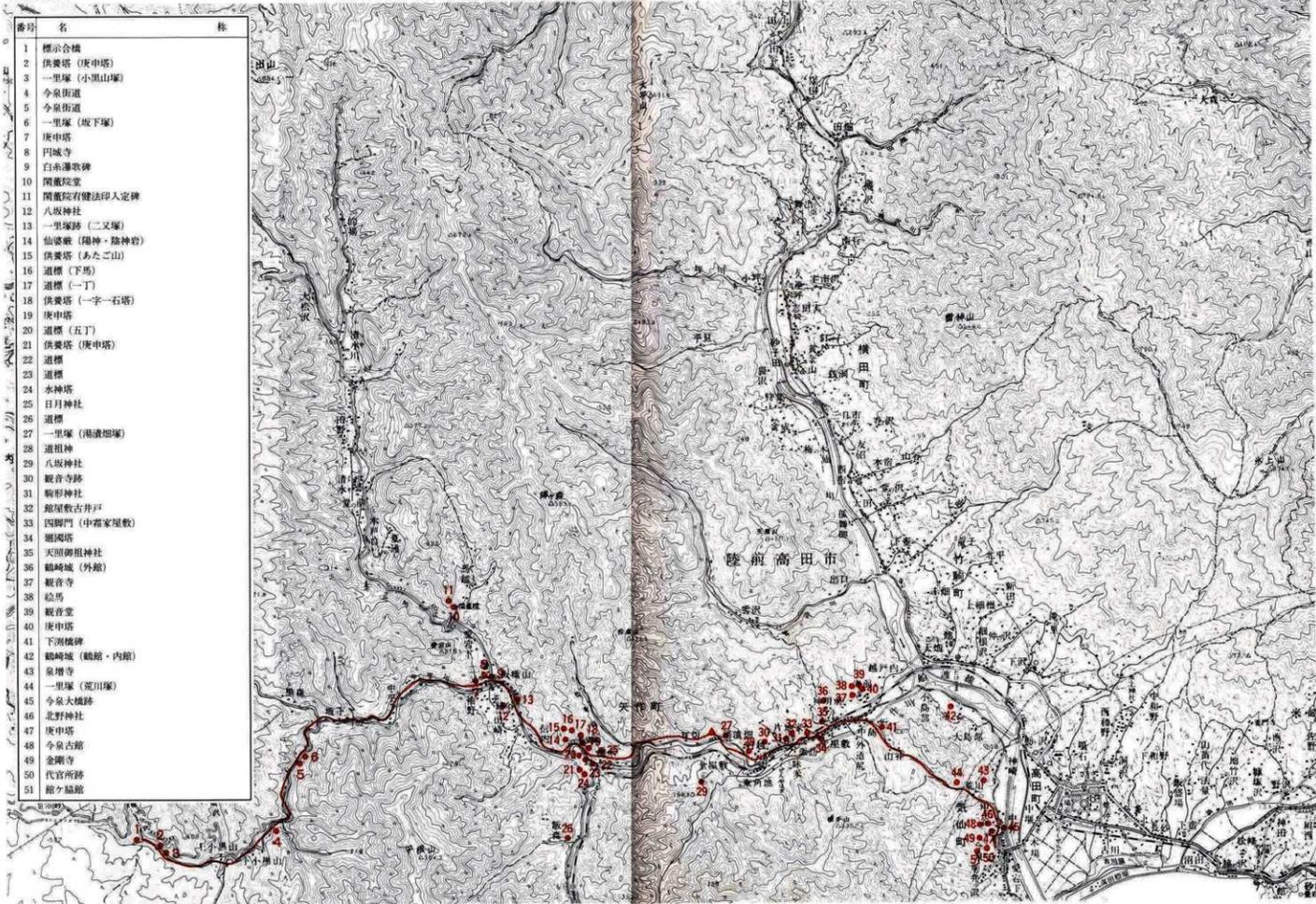


今泉街道②

番号	名	種
1	境界（長坂と撰沢）	
2	渡船碑	
3	雲南田の庚申碑	
4	雲南神社	
5	札田の庚申碑	
6	観音堂	
7	宿駅（撰沢駅）	
8	高建寺	
9	地藏（高建寺）	
10	供養碑（高建寺）	
11	八丁窟	
12	五輪塔	
13	但馬崎の古碑（群）	
14	八幡神社	
15	八幡神社境内の古碑（群）	
16	根城窟	
17	荒神社	
18	雄水の一里塚跡	
19	折坂の窟座碑	
20	折坂の古碑（群）	
21	折坂の結入り道しるべ	
22	藤善神社	
23	折坂の古碑（群）	
24	山口の古碑	
25	金鳥神社	
26	金鳥神社の庚申碑	
27	山吹の庚申碑	
28	大原神社	
29	大原神社の庚申塔	
30	山吹城	
31	春日神社	
32	宿駅（大原宿）	
33	薬師堂	
34	薬師堂の古碑（群）	
35	清水田の古碑（群）	
36	長泉寺	
37	古碑（群）	
38	八幡神社	
39	八幡総の古碑（群）	
40	八幡総の石像（群）	
41	鳥崎窟	
42	久保塚の古碑	
43	法華寺	
44	久保塚の古碑	
45	山口の古碑（群）	
46	源六（山王洞穴）	
47	山口の一里塚	
48	山口の供養塔	
49	山口の古碑	
50	山口の古碑	
51	菅の田の石像（群）	
52	境界（大原と欠作）	



今泉街道3



この地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図を複製したものである。(承認番号)昭55地 報、第228号

漢學文化財調査報告書 第四十一集

全 京 街 道

昭和五十五年三月三十一日 発行

編 集 岩手縣教育委員会事務局文化課

発 行 岩手縣教育委員会

印 刷 山口北州印刷株式会社